

総会神学校集中講座

在日大韓基督教会史

資料集



1883年(明治16年)

全国基督教徒大親睦会幹部

資料 I - 1

日本教育旅行KK複製

Korean Students in Tokyo

J. M. CLINTON, TOKYO

The stream of Korean students continues to flow towards the land of the Rising Sun, regardless of the strong racial feeling between the two peoples. They are willing to sit at the feet of their conquerors to learn the secret of Japan's success. There are today 700 Korean students in Tokyo alone, an increase of 200 over last year. Men of all ages are coming, but no less than 100 are under eighteen years. The average age is nineteen as against twenty-two last year.

Of the 700 students, 87 are supported by the Korean Government, the remaining 600 by private means. One of the Japanese schools supports a few, and a few are compelled to make their own way. There are three clubs among the for there is no Korean pastor in Japan and very few join the Japanese churches, owing to prejudice. Mr. Kim is a good shepherd for the flock, but we consider it extremely desirable to have a regular Korean pastor or a Korean speaking foreign pastor.

The educational classes of the Association enrol more than 100 students. English, Japanese, history and mathematics are taught. The Korean Government Superintendent of Students in Tokyo is a Christian and recently, when the Association outgrew its classrooms in a small Japanese building, he offered the use of a large building and garden belonging to the Korean Government. One of our greatest needs is a permanent hall and dormitory.

There is a staff of six Korean secretaries and teachers, who are developing into good workers. The Koreans are ignorant of affairs but are kind, faithful, and simple-hearted. What Korea needs is educated Christian leaders.

Tokyo affords a fine training ground for such leaders. Steady application, eagerness in study, and ability to adapt themselves to new conditions, all indicate that among these students is the raw material of leadership. Mr. Kim is an example of what can be done by Christianity. From the day when he surrendered to the Master, his life has been a witness to the power of the Christian faith. His steadfastness, courage, consistent life and sympathetic spirit have given him a firm hold on the students. It is in lives thus changed and moulded by the spirit of

Christ that we find hope for Korea.

資料 I - 7 朝鮮人の日本人への移住および居住状況

年 代	居住人口	増加人口	従用動員数	備 考
1885 (明18)	1	—	—	—
1895 (明28)	12	11	—	日清戦争終結
1905 (明38)	303	291	—	日露戦
1907 (明40)	459	156	—	—
1908 (明41)	459	0	—	—
1909 (明42)	790	331	—	—
1910 (明43)	2,246	1,456	—	日韓併合
1915 (大4)	3,989	—	—	第一次大戦中
1916 (大5)	5,638	1,649	—	—
1917 (大6)	14,501	8,863	—	—
1918 (大7)	22,262	7,761	—	土地調査事業完了
1919 (大8)	28,272	6,019	—	3.1独立運動
1920 (大9)	30,175	1,901	—	産業増殖樹立計画
1921 (大10)	35,876	5,693	—	通航制限制度廃止
1922 (大11)	59,865	23,989	—	—
1923 (大12)	80,617	20,759	—	関東大地震
1924 (大13)	120,238	39,621	—	—
1925 (昭元)	133,710	13,472	—	渡航制限制度実施
1926 (昭元)	148,503	14,793	—	—
1927 (昭2)	175,911	27,408	—	日本経済恐慌発生
1928 (昭3)	243,328	67,417	—	—
1929 (昭4)	275,031	32,703	—	世界経済恐慌発生
1930 (昭5)	298,091	22,060	—	—
1931 (昭6)	318,212	20,121	—	満州事変勃発
1932 (昭7)	390,543	77,331	—	—
1933 (昭8)	456,217	75,674	—	自力更生運動
1934 (昭9)	537,576	71,359	—	—
1935 (昭10)	625,678	88,102	—	—
1936 (昭11)	690,501	64,823	—	—
1937 (昭12)	735,689	45,188	—	日中戦争勃発
1938 (昭13)	799,865	64,176	—	—
1939 (昭14)	961,591	161,726	38,700	国民労働計画
1940 (昭15)	1,190,444	228,853	54,944	職業紹介令実施
1941 (昭16)	1,469,230	278,766	53,493	太平洋戦争勃発
1942 (昭17)	1,625,054	155,824	112,007	朝鮮徴用令実施
1943 (昭18)	1,882,456	257,402	122,237	—
1944 (昭19)	1,936,843	54,387	280,303	朝鮮徴兵令実施
1945 (昭20)	2,365,253	428,420	1,160,427	日本降服(終戦)

資料II-2

在日朝鮮基督教會 教勢 1908年～1945年

在日大韓基督教會歴史編纂委員会

教 會	祈 禱 所	牧 師	伝道師			教 會 役 員	洗 禮 教 人	教 人 總 數	日曜学校		夏期聖書学校		女伝道会		勉励青年会		夜学校		保育園		貢 金 額	備 考				
			男	女	学 生				數	教 師	生徒	數	教 師	生徒	數	会 員	數	教 師	生 徒	數	教 師	園 児				
1908	1		0																							
1909	1		1					40															聖書クラスに100名が登録。 定期礼拝。			
1910	1		0																							
1911	1		0					158														週平均1円				
1912	1		1																							
1913	1		1					80	160													毎週出席者80～100名。				
1914	1		1					77	208																	
1915	1		1																							
1916	1		1																							
1917	1		1					約50														求道者20名。				
1918			1																							
1919			1																							
1920																										
1921			1																							
1922			2																							
1923			2					(74)	(137)													カッコ内は東京地区の数のみ。				
1924			2																							
1925	集会所 20	2						293	928													¥1,209				
1926	集会所 19	2						449	1,099	10												¥1,375.27				
1927		3																								
1928	集会所 30	4	4	3	2			367	998	19	488				6		12			2	45	¥4,297.82	男伝道師中1名は秘書伝道師。			
1929	24 10	6	7 (3)	(1)	(2)		92	416	1,254	21	532	2					12	437	8		181	2	53	\$3,898.16	男伝道師中1名は秘書伝道師。	
1930	36 グル ープ (42 説教所)	6	1	7	2			601	2,216	29(内3は大人、 8は子ども学校)	24	64	737	13		14		11			4	5		保育園兼夜学が1つ存在。その数は 含めない。男伝道師は秘書伝道師。 女伝道師中2名は訓練中。保育園教 師中3名はアシスタント。		
1931	30 11	9	7 (2)	(6)		140	828	2,416	29 24	92 25	1,009 407	33	102	1,373	14	281	19	540	12	38	470	4	6	119	\$5,656.65	日曜学校中、上段は大人、 下段は子ども学校を示す。 伝道師カッコ内は本文より。
1932	44 12	7	2	9	10	195	632	2,052	45	214	1,704	39	127	1,985	19	412	27	685	16	46	652	6	8	177	\$5,881.62	

教会	祈禱所	牧師	伝道師			教会役員	洗礼教人	教員総数	日曜学校			夏期聖書学校			女伝道会		勉励青年会		夜学校			保育園		献金額	備考			
			男	女	学生				数	教師	生徒	数	教師	生徒	数	会員	数	教師	生徒	数	教師	園児						
1933	45	18	10	5	18		199	824	2,752	42	226	2,448	54	191	2,778	30	651	28	792	24	62	664	7	9	235	¥13,529.61 (\$6,764.81)		
1934	45	22	9	2	14	9	183	768	2,851	36	198	2,416	49	158	2,486	24	622	24	750	7	20	190	7	9	193	¥13,747.80 (\$6,873.90)		
1935	49	23	12	4	21	4	218	1,098	3,192	87	271	2,784	56	164	2,207	39	735	31	834				7	9	222	¥24,790.60		
1936	集会所 52							1,009	3,038				69	222	2,999	40									¥26,619.95	祈祷所数 18。		
1937	56	15	13	3	28	8				63		2,226	31		1,561	41	996							6		215	¥41,787.69 (\$13,929.28)	教会数中、無長老の教会数は 41。長老数 17 名。
1938	55	19	13	2	28	7	286	1,391	3,511	65		2,346	64		2,383	41	946							5		209	¥39,288.45	教会数中、長老がいない教会数は 42。
1939																												
1940	集会所 58		23	3	28	3		2,404			61	2,320	41		1,474								6		225	¥78,744 (\$22,048.82)	自給教会数 28。	
1941																												
1942	46	24		9	7			1,960	3,213	39		1,429														¥82,935	自給教会 11。伝道教会 8。伝道所 27。牧師中、日本人 6 名。男性伝道師中、日本人 5 名。	
1943																												
1944																												
1945	48		25	44(現住者 9)					3,088																	牧師中、現住者 12 名。		

『典拠資料』1909 年度は、J. M. Clinton 著「Korean Student in Tokyo」(『The Pioneer』1909.1, p.2f)、1911 年度は『大韓예수교長老会老会第 5 回会議録』(p.11)、1913 年度は『第 2 回朝鮮예수교長老会総会録』、1914 年度は『第 3 回朝鮮예수교長老会総会録』、1917 年度は『Minutes of the Twenty-fifth Annual Meeting of the Council of Presbyterian Missions in Korea』に依拠。1923 年度及び 1925~1927 年度は『Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea』より、東京地区と神戸・大阪地区（又は神戸・大阪・京都地区）の統計を足したもの。1928 年度の集会所、洗礼教人、教員総数、主日学校関係、保育園数、青年会数、女伝道会数は『朝鮮耶蘇教聯合公議会第 9 回会議録』、1935 年度は『The Korea Mission Field』(1936 年 4 月号)を参照。1936 年度の集会所、洗礼教人、教員総数は『한국예수교장로회총연합회』(전택부著、韓国基督教教会協議会 1979 年)、園児数は『The Chosen Christian Church in Japan Proper』L. L. Young『The Korean Mission Field』(1934 年 5 月号)に依拠。1942 年度は『1942 年日本基督教団第 1 部年間』(1943 年 1 月)、1945 年度は『日本基督教団総務局資料 (1945 年 2 月)』に基づく。その他は『The Acts and Proceedings of the General Assembly of the Presbyterian Church in Canada』の本文並びに教勢報告表を参照。尚、1930 年度については、『PCC 総会録』の報告書本文及び『Our Korean Work in Japan』(Margaret Ness, The Women's Missionary Society (W.D.) of the Presbyterian Church in Canada)に出てくる数字を元に再構成したので、不明な点も多々あるが、教勢の傾向を見るのには充分に参考になると思われる。

<2000 年 8 月 25 日 李相勲・李清一 作成>

資料II-3

朝鮮基督教會 牧師名観察芳月間一覽
<2000年8月29日 李相烈作成>

韓錫晉 1909年10月～12月
朱孔三 1913年～1914年末
吳基善 1914年8月～1916年9月30日、1921年～1924年
李汝漢 1916年9月30日～1917年6月15日
林鍾純 1917年11月7日～1921年
金二坤 1922年～1924年1月9日
徐相賢 1924年9月～1927年7月
朴淵端 1924年10月～1927年3月
吳澤寬 1926年11月～1939年
韓泰裕 1927年3月～1939年
申公淑 1927年10月～1929年8月
朴尚東 1926年10月～1945年11月6日
李寅涉 1929年4月～1932年9月
金吉昌 1929年12月15日～1932年12月
崔敬學 1930年1月～1936年？
金致善 1930年～1942年11月14日
金應泰 1931年9月～1934年3月
崔永來 1931年12月28日～1934年
吳根睦 1932年1月～1936年？
高麗偉 1932年～1938年8月
金洙皓 1932年11月～1935年5月
文宗洙 1933年～1942年11月6日
朱鏡裕 1934年～1943年7月12日
李完模 1934年12月～1944年8月18日
崔錫柱 1935年10月～1942年9月15日
盧震鉉 1935年11月～1942年2月2日
金光銖 1936年～1938年
金基圭 1937年5月～1941年1月（牧師接手1937年5月）
禹東哲 1937年5月～？
秋仁奉 1937年～1943年6月22日（牧師接手1937年12月）
金泰鍊 1938年7月20日～1944年5月11日
徐丙烈 1939年4月～1940年1月16日（牧師接手1939年5月20日）
全重煥 1939年4月～1948年2月16日
李守弼 1939年5月20日～1943年7月9日（牧師接手1939年5月20日）
全仁善 1939年～1948年2月16日（牧師接手1939年5月30日）
金容錫 1939年11月～？
李相國 1940年2月4日～？
安崇俊 1940年2月12日～1948年2月16日
黃善伊 1940年3月～1941年9月（牧師接手1940年3月）
韓命東 1940年3月～1944年9月21日（牧師接手1940年3月24日）
鄭箕煥 1940年4月～1942年3月（牧師接手1940年3月？）
朴炳勲 1940年4月～1942年2月2日（牧師接手1940年3月24日）
鄭熙澤 1940年4月～？（牧師接手1940年3月、日本基督教会から）
金恩錫 1940年8月15日～1942年2月1日
洪淳鐸 1941年5月11日～1942年
宋永吉 1941年6月～1944年10月
吳允台 1942年2月23日～
李永植 1944年2月～1948年5月20日

資料II-4

東京教會歴代牧師一覽

1909年10月～12月 韓錫晉(長)
1913年9月～1914年末 朱孔三(長)
1914年8月～1916年9月30日 吳基善(監)
1916年9月30日～1917年6月15日 李汝漢(長)
1917年11月7日～1921年 林鍾純(長)
1921年～1924年 吳基善(監)
1924年9月～1927年7月 徐相賢(長)
1927年10月～1929年8月 申公淑(監)
1929年12月15日～1932年12月 金吉昌(長)
(1930年から、横浜、目黒、雑司ヶ谷等を視務)
1931年9月～1934年3月 金應泰(監)
(神田、月島、1932年12月2日より横浜兼牧)
1934年5月1日～1935年5月 金洙皓(監)
(神田、横浜、深川、駒込教会)
1935年10月～1942年5月 崔錫柱(長)
(神田、深川、駒込教会)
1935年～1939年 吳澤寬(長)
(1937年4月に東京中央教会と名称変更)
1938年10月1日～1942年11月14日 金致善(長)
(1939年11月就任礼拝 東京の新宿中央教会)
1942年2月23日～ 吳允台(長)
(1942年2月23日～日本基督教団雑司ヶ谷伝道所)

資料II-5

2・8 独立宣言書(日本語訳文)

朝鮮青年独立団はわが二千万の民族を代表し、正義と自由の勝利を得た世界万国の中にわが独立を期成せんことを宣言する。わが民族は四千三百年の長い歴史を有し、世界最古の民族の一つである。時には中国の正朔を奉じたことはあったが、これは尚國皇室の形式的な外交関係に過ぎなかつた。朝鮮は常にわが民族の朝鮮であり、いまだかつて一度として統一国家であることを失い、異民族の実質的支配を受けたことはなかつた。

日本は朝鮮が日本と唇齒の関係にあることを自覚していると称して、1895年清日戦争の結果率先して韓国の独立を承認した。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアなどの諸国もまたみな独立を承認しただけなく、これを保全することを約束した。韓国もまたその思義に感じ銳意諸般の改革をおこない、國力の充実を図つたのである。

当時ロシアの勢力が南下し東洋の平和と韓国の安寧を脅かしたので、日本は韓国と攻守同盟を結び、露日戦争をはじめたが、東洋の平和と韓国の独立はこの同盟の主旨であった。ここにおいて韓国はいよいよその好意に感じ、陸海軍の作戦上の援助はできなかつたが、わが主權の威儀までも犠牲にしておよそ可能な限りの義務をつくし、東洋の平和と韓国独立の二大目的を追求した。

しかしその戦争が終結するにおよんで、当時のアメリカ大統領ルーズベルトの仲裁によって講和会議が開かれたが、日本は同盟国である韓国の参加を許さず、露日両国の代表は日本の韓国にたいする宗主権を任意に議定した。日本はその優越した兵力を持み、韓国の独立を保全するという旧約に違反し、韓国皇帝および政府を脅かし、韓国の國力充実によって独立が得られる時期までという条件をおしつけて欺き、韓国の外交権を奪って、日本の保護國となし、韓国をして世界列国にたいし直接交渉する道を断たしめた。さらに相当の時期までという条件で司法・警察権を奪い、徵兵令実施までという条件で軍隊を解散し、民間の武器を押収して日本の軍隊と憲兵警察とを各地に配置した。甚だしきは皇宮の警備までも日本人の警察を使用するに至った。このようにして遂に韓国を無抵抗なものにしながら、わが明哲な光武皇帝を放逐し、精神の発達が充分でない皇太子を擁立して利用し、日本の走狗をもつていわゆる内閣を組織し、ついに秘密と武力とをもって合併条約を締結した。ここにわが民族は建国以来半万年にして自己を指導し援助すると約束した日本軍閥の野心的政策の犠牲となつた。實に日本の韓国にたいする行為は詐欺、暴力から出たものにして、このような詐欺による大きな成功は、まことに世界興亡史上特筆すべき人類の大恥辱といわねばならない。

かの保護条約を締結するとき皇帝と賊臣を除く数人の大臣はあらゆる反抗手段をつくし、その発表の後もわが全国人民はみな義手でもって可能な限り反抗した。司法・警察権が奪われ軍隊が解散されたときもまた同じく反抗した。こうして合併の際には、手中に寸鐵の武器をもたず、可能な限りの反抗運動を試みたが、精銳な日本の武器により接戦となつたものは数知れない。以後10年間、独立を回復するための運動で生命を犠牲にしたもの、また数十万に達した。かの惨酷な憲兵政治のもとで、手足と口舌の自由を奪われながらも、独立運動は間断なくつづけられた。これらによってみても、韓日合併は朝鮮民族の意思ではないことを知らねばならない。このようにして、わが民族は日本軍閥主義の野心家の詐欺、暴力のもとに民族の意思に反する運命におかれた。それ故に正義、人道をもって世界を改造するこの時にあたり、その匡正を求むることは当然の権利であり、また世界改造の主人公であるアメリカ、イギリスは保護と合併にたいし率先して承認をしたという理由によって、今日その旧悪を譲りうる義務がある。

また合併以来の日本の統治政策をみると、かの合併当時の宣言に反し、わが民族の幸福と利益を無視し、征服者が被征服者にたいするような古代の非人道的な政策を襲用し、わが民族にたいし參政権、集会・結社の自由、言論、出版の自由などを一切許さず、甚だしきは信教の自由、企業の自由に至るまでも拘束している。行政、司法、警察などの諸機関で朝鮮民族の私権さえも侵害しないものはない。

公的にも私的にもわが民族と日本人との間に優劣の差別を設け、わが民族には劣等の教育を施し、永くわが民族を日本人の使役者にしようとしている。歴史を書き改め、わが民族の神聖な歴史的、民族的伝統と威儀を破壊し、さらに凌辱を加えている。少数の官吏を除くほかは、政府の諸機関、交通、通信、兵備などの諸機関の全部あるいは大部分には日本人を使用し、わが民族に永遠に国家生活の智能と経験を得る機会を与えないようにしている。わが民族は、このような武断專制の不正、不平等の政治のもとでは、決してその生存と發展を享受することができない。それだけではない。人口過剰の朝鮮に無制限の移民を奨励し、土着のわが民族が海外に流離するのやむなきにいたらしめた。また政府の各機関はもちろん私設の諸機関にまでもことごとく日本人を使用し、一方ではわが国民に職業を失わしめ、また他方ではわが国の富源を日本に流出せしめた。また商工業においても日本人に対してのみ特殊な便益を与え、わが民族にはその産業發展の機会を失わせている。このようであらゆる方面でわが民族と日本人の間の諸般の利害は互いに相反し、その害を受くるものはわが民族である。故にわが民族は生存の権利のために独立を主張するのである。

最後に東洋平和の見地からみても、かの最大の脅威であったロシアはすでにその軍事的野心を放棄し、正義と自由にもとづき新国家の建設に従事している。中華民国もまた同様である。さらに今後國際連盟が実現すれば、再び軍国主義的侵略を敢行する強國はなくなるであろう。とすれば韓国併合の最大の理由はすでに消滅している。これより、もし朝鮮民族が無数の革命の乱をおこすとすれば、日本に合併された韓国は却つて東洋平和を乱す禍根となるであろう。わが民族はただ一つの正当な方法によってわが民族の自由を追求する。もしこれが成功しなければ、わが民族は生存の権利のために自由な行動をとり、最後の一人に至るまで必ずや自由のために熱血をそそぐであろう。これがどうして東洋平和の禍根とならないであろうか。わが民族は一兵ももっていない。わが民族は兵力をもって日本に抵抗する実力はない。しかしながら、日本がもしわが民族の正当な要求に応じなければ、わが民族は日本にたいし永遠の血戦を宣布せざるを得ない。

わが民族は高度の文化をもってからすでに久しい。そしてまた半万年にわたる国家生活の経験をもっている。たとえ多年の専制政治の害毒と境遇の不幸がわが民族の今日を招いたものであるにせよ、今日より正義と自由とともにとづく民主主義的先進国の一範に従い、新国家を建設するならば、わが建国以来の文化と正義と和平を愛好するわが民族は必ずや世界の平和と人類の文化にたいし貢献するであろう。ここにわが民族は日本および世界各国にたいして自決の機会を与えることを要求する。もしその要求が入れられなければ、わが民族はその生存のために自由な行動をとり、わが民族の独立を期せんことをここに宣言する。

1919年2月8日

朝鮮青年独立団代表

崔八鑑 尹昌錫 金度演 李宗振 李光洙 朱繼白 金岳壽 崔謹愚 白寬洙 金尚德 徐椿

決 議 文

- 一、韓日合併はわが民族の意思によるものでなく、わが民族の生存と發展を脅かし、また東洋の平和を乱す原因となっている。それ故に本団は、わが民族の独立を主張する。
- 二、本団は、日本の議會と政府にたいし朝鮮民族大会を召集し、その大会の決議をもってわが民族の運命を決定する機会を与えられんことを要求する。
- 三、本団は、万国平和會議における民族自決主義をわが民族にも適用せんことを請求する。またその目的を達するためには、日本に駐在する各國大使、公使にたいし、本団の意見を各自の政府に伝達することを要求する。同時に委員二人を万国平和會議に派遣し、わが民族全体の派遣委員と一致した行動をとる。
- 四、以上の諸項の要求が不幸にも失敗すれば、わが民族はただ日本にたいし永遠の血戦をなすのみである。これによって生ずる惨禍についてわが民族はその責任を負わない。

資料III-1

基督教報 1928.10.10



資料III-2

ソウル會議 合意事項

(1) Our Church to become a member of the Federation, and one of our missionaries to be our representative on the committee, Mr. Young to act for the present.

(2) That Mr. Young be superintendent of all the work among Korean people in Japan which shall be carried on by our Church and the Federated Council of Churches and Missions in Korea.

(3) That estimates for this work be prepared by Mr. Young and submitted to the Committee and passed by them before being sent to our mission Boards.

(4) That Mr. Young confer with the committee in regard to the appointment of Korean workers.

(5) That Rev. Dr. Clark be asked to continue as Secretary in Seoul, and that a local treasurer be appointed in Kobe or other convenient place in Japan, to whom funds from our Boards in Toronto and the treasurer in Seoul will be sent; payment from these funds to be made on requisition by Mr. Young.

(6) That the name of the Church be the Korean Christian Church. The members of your delegation have impressed very strongly on the Koreans, both here and in Seoul, that the policy of our Church is to give every emphasis to evangelistic work and that we will not be drawn into educational enterprises. We have also made it very clear to the Koreans here that this is their Church and they must accept a large share of the responsibility for carrying it on.

That we are glad to help them in this work but that they and we should look forward to the time when they will be able to carry it on without our help.²³

カナダ長老教会総会会議録 1928 (pp.41f)

在 日 本 朝 鮮 基 督 教 會 憲 法 · 大 會 規 則

在 日 本 朝 鮮 基 督 教 會 憲 法

序 文

此ノ憲法ハ在日本朝鮮基督教會、聖職ニ在スル牧師及宣教師等ガ、昭和九年二月（救主降生一千九百三十四年）神戸ニ會合ニ
鮮耶蘇教長老會憲法及基督教朝鮮監理會教理ト章程ニ基キ在日本朝鮮基督教會ノ組織ヲ完成シ自治ノ基ヲ開キテ之ヲ制定シタルモノニ

宣 言

在日本朝鮮基督教會ハ全世界基督教會ト共ニ靈體監理問答及使徒信經ヲ本政會ノ教理ノ法則トシテ之ヲ信條ニ用ユルコト左ノ如シ

信 條

- 三位 第一、神ノ本體ハ聖父、聖子、聖靈ニ三位ニ分子、本體ハニシテ其ノ機能ト榮光ハ同等ナルコトヲ信ズ
- 聖父 第二、神ハ獨ニノミ在マス、惟神ニノミ禮弄スベシ、神ハ自然ニ在マス。不在ノ所無クシテ他ノ神ト凡テノ物質ト區別ア
ラル。其ノ存在ト智慧ト機能トハ聖ニシテ、仁慈ト眞實ト愛ニ至リテハ無限無窮、永遠ニ變リ給ヘザルナリ。
- 聖子 第三、神ハ人類ヲ罪ヨリ救ヒ永遠ノ生命ヲ與ヘント欲シ給ヒ、無限ナル愛ヲ以テ其ノ御獨子ヲ世ニ遣シ給ヘリ。神ノ子ハ
ナリ給ヒス。彼ノミ人ヲ救ヒ給フ。
- 其永遠ナル御獨子ニ二品性アリ給フ。永遠ニ至ル道眞ノ神眞ノ人ニテ在マシ給フ。聖靈ニヨリテ孕マレ童貞女マリアニ生

ヒタレ下罪ナカリキ。罪人ヲ贖ハシタル聖靈ハ人間ノ靈魂ヲ罪ト悲憤ト死ヨリ甦ラスルテ掌リ給フ。人ノ心ヲ清クセシメ精神ヲ新ニシ福音ヲ價ヒ無ク與フルイエス・キリストヲ受ケシメ、キリストノ内ニアル總テノ義ヲ現シ漸次靈化シ榮光ヨリ榮光ニ入ラシメ世ヲ審カン爲メニ再ビ來リ給フ。

聖靈 第四、父ト子トガ遠ハシタル聖靈ハ人間ノ靈魂ヲ罪ト悲憤ト死ヨリ甦ラスルテ掌リ給フ。人ノ心ヲ清クセシメ精神ヲ新ニシ福音ヲ價ヒ無ク與フルイエス・キリストヲ受ケシメ、キリストノ内ニアル總テノ義ヲ現シ漸次靈化シ榮光ヨリ榮光ニ入ラシメ世ヲ審

第五、舊新約聖書ヘ聖靈ニヨリテ賜ヘリタル神ノ聖言ニシテ信仰ト行為ソ、唯明確且ツ完全ナル法則ナリ（創世記、出埃及記、レビ記、民數記、申命記、ヨシニア記、師士記、ルツ記、サムエル前書、サムエル後書、列王記略上、列王記略下、歷代志略上、歷代志略下、ニズラ書、尼希米亞記、エスティル書、ヨブ記、詩篇、箴言、傳道之書、雅歌、イザヤ書、エレミヤ記、エレ

ミヤ哀歌、以西結書、ダニエル書、ホゼア書、ヨニエル書、アモス書、チバテヤ書、ヨナ書、米迦書、ナホム書、哈巴谷書、ゼ

バニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書、マタイ傳、マルコ傳、ルカ傳、ヨハネ傳、使徒行傳、ロマ書、コリント前書、コリント後書、ガラテヤ書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、テサロニケ前書、テサロニケ後書、テモテ前書、テモテ後書

テトス書、ピレモン書、ペブル書、ヤコブ書、ペテロ前書、ペテロ後書、ヨハネ一書、ヨハネ二書、ヨハネ三書、エダ書、ヨ

ハネ默示錄）

犯罪 第六、人類ノ先祖タルアダムハ神ノ命令ニ背キ罪ヲ犯カセシモノナリ。其子孫ハ普通生殖ニヨリ犯罪墮落セリ。其ノ原罪ト腐

敗ト共ニ實行犯タルニヨリテ全人類ハ此ノ世ト來世ニ於テ神ノ怒ヲ受クベキモノトナレリ。

教援 第七、神ハイエス・キリストニヨリテ愛スル者ヲ價ナシニ救ヒ給ヘリ。命ジテ曰ク罪ヲ悔改メ、主イエス・キリストヲ救主ト

信ジ其模範ニ從ヒ遙リテ聖ナル生活ヲナシ、ゾノ御旨ニ從フベシ。總べテ是ニ從フモノハ救ヒ、其ノ恵ニヨリテ義トナシ、神

ノ子女トナシテ永遠ニ至ラシム。カカル大ナル事業ヲ成就シ給フ聖靈ハ特ニ聖書ト聖禮ト祈禱ヲ方途トシテ使用シ給フ。

教會

第八、主ノ聖旨ニ從ヒ聖言ノ真理ヲ明ニシ、制定シ、政治ヲ守ル團體ヲ以テ組織ス。コレ神ノ教會ナリ。イエス・キリストノ

聖身ナリ。之ヲ聖靈ノ殿ナル聖教會ト云フ。

聖禮

第九、洗禮ト聖餐ヲ設ケ給ヘリ。洗禮ハ牧師水ヲ以テ聖父、聖子、聖靈ノ聖名ニヨリ施ス。此レ主ノ御血ヲ以テ點リテ表スモ

ノナリ。聖餐ハ麵麪ト葡萄汁ヲ以テ施ス。コレ主キリスト十字架ニ釘ケラレタルヲ紀念ス。信者ニハ表記ト保證トニナルモノ

ナリ。但シ聖禮ノ益ナルハイエス・キリストノ祝福ト信仰ヲ以テ參禮スル者ノ内ニ聖靈ノ働き給フニヨル。

審判

第十、凡ソ人生ノ終リノ日ニ至リ自己ノ行為ノ健キリストノ審判ヲ受クル者ナリ。イエス・キリストヲ信スル者ハ永遠ノ生命

ニ入り信ゼザル者ハ永遠ノ刑罰ニ入ラン。

承認

教會ノ信條ハ神ノ聖言ニ基キ之ノ明確且ツ完全ナルコトヲ受納レ又ハ吾個人ノ信條トシテ公布ス。

教會憲法稱

一、本教會ヲ在日本朝鮮基督教會ト稱ス

第一章 教會及信徒

一、教會ノ區別、教會ニ有形及無形ノ區別アリ。即テ無形ノ教會ハ人ノ目ニ現ヘレズ神ノミニ儀ス。有形ノ教會ハ世界ニ散在ス。其會

ハ神ヲ崇奉スルモノニシテコレヲ基督教者トス。

二、教會ノ組織　日本内地ニ住居スル朝鮮同胞ニシテ未憲法ニ從フ者ヲ以テ之ヲ組織ス。

三、教　　會　舊新約聖書ニヨリテ賜ハリタル聖言ニ從ヒ、一定ノ場所ニ集會シ神ニ禮拜スルモノトス。

四、正　　會　員　本教會ニ於テ洗禮ヲ受ケ又ハ他教會ヨリ無欠轉入シタル者ヲ謂フ。(但シ選舉權ト被選舉權アリ)

五、幼兒洗禮　信者ノ子女四歳以下ノモノニシテ父母之ノ代リ問答ス。

六、學　　習　人　六箇月以上教會ニ出席シ成績良好ニシテ試験ニ合格シタルモノヲ謂フ。

七、求　道　者　キリストヲ信ジ教ハレ度ク思フ者ヲ謂フ。

第二章 教　　會　職　　員

一、職　　員　牧師、長老、勸師、執事、司職ヲ置ク。

牧師ハ説教ト治理ニ業務シ聖禮ヲ施シ擔任シタル教會ヲ總務スル者ナリ、長老ハ其所屬シタル教會ニテ活用ラヌ信者ノ代表ナリ。勸師ハ長老ナキ教會ニ於テ服務スルモノナリ。執事ハ牧師長老ト協力シ寄附行為ヲナシ教會ノ會計事務ヲ掌ル。(但シ聖經ニ參與スル者ニ限ル)

二、職員資格

1、牧師ハ學識(常識、神學)豐富ニテ神學校ヲ卒業シ、品行方正ニシテ説教ト教授ニ能アル者ヲ大會ガ按手在職シタル者ナリ。
2、長老ハ年齢二十歳以上ノ者ニシテ、家族ト共ニ本教會ニ入會シ滿二箇年、洗禮ヲ受ケテヨリ滿五箇年ヲ經過シタル者ヲ以テシ
正會員廿名ニ一名比例ニテ有權者三分ノ二ノ投票ヲ得テ當選シ其ノ行為アモテ前書第三章一節ヨリ七節ニ該當スルモノトス。

四

當選後六箇月間教養シテ中會之ヲ試験シ合格ト認ムルモノトス(但シ任期ハ三箇年トシテ再選ノ場合ハ牧師之ヲ留任ス。)

3、勸師　正會員二十名未滿ノ教會ニテ選舉ス。(但シ小會ニテ之ヲ試験ヘ任期ハ二箇年トス。其他ハ長老ト同一ナリ)

4、執事ハ正會員三分ノ一投票ヲ得テ選舉セラルモノニテ眞實ナル信仰ヲ有シ其品行方正ニシテ福音ニ適合シ奉仕的ノ精神アルモノトス(但シ任期ハ一箇年)

三、臨時職員　教會ノ事情ニヨリ左記ノ臨時職員ヲ選定ス

1、男女傳道師ハ牧師及教會ノ推薦ニヨリ選定サレタルモノヲ中會之ヲ試験シ合格ト認ムル者ニシテ支教會ノ事務ヲ補助セシム(但シ有給者ニ限ル)。

1、権利　小會及中會ニテ投票權ハナクトモ發言權ヲ有ス。

1、資格　年齡二十五歳以上ニシテ神學校二年以上ヲ修業ノ程度又ハ聖書學院ヲ卒業シタルモノト同等ノ資格アルモノトス

第四章 議　　會

一、教人議會　正會員ヲ以テ之ヲ組織ス(但シ會長ハ牧師トナス)

1、集會　總會ハ年一回ニテ正會員三分ノ一又ハ上會ノ命令ニヨリ必要ト認ムル聯合牧師之ヲ召集ス定期總會ニ於テ處理すべき事項左ノ如シ

1、小會ノ經過事項ヲ聽取ス

2、職員會及各附屬會ノ事業報告ヲ聽取ス

3、教會ノ會計決算報告ヲ聽取ス(但シ検査済ノモノ)

五

4、職員會ニ於テ提出シタル來年度収支算書ヲ討議決定ス。

5、牧師自身ニ關スル事務ハ他ノ牧師ヲ招キ之ヲ代理處理スル事ヲ得（但シ一般ノ決定ハ會員過半數ヲ以テシ、牧師自給招聘ニ關スル件ハ正會員三分ノ二ノ投票及學習人過半數ノ票數ヲ要ス）定期總會ハ一週間以前ニ時日及提議事項等ヲ教會ニ公布スペシ

職員會

1、組織、支教會ノ小會員勸師及執事職ヲ以テ之ヲ組織ス。會長ハ牧師トナス。書記及會計ハ職員會ニ於テ之ヲ選舉ス（但シ必要ト認ムル場合ハ傳道師、共聯合會々長及日曜學校々長ニ協同會員權ヲ與フ。）

2、未組織教會ニ於テハ牧師、傳道師、勸師及執事等ガ職員會ノ事務ヲ執行スルコトヲ得

3、職員會ハ教會ノ豫算編成及金錢ニ關スル件ヲ處理ス

4、職員會ハ毎年定期教人議會ニ於テ經過狀況ヲ報告シ一般ノ收支總決算書ニ検査ヲ受クベシ

小會

1、小會組織 小會ハ牧師及長老ヲ以テ之ヲ組織ス

2、開會成數 小會ニ長老二人ナレバ長老一人及牧師ヲ以テ開會スルコトヲ得 長老三人以上ノ場合ハ長老二人及牧師ヲ以テ開會ス

3、會長ハ支教會ノ牧師ニ限ル。但特別ノ境遇ニハ小會ノ決議ヲ以テ中會ニ屬スル他牧師ヲ招キ之ヲ代理トナス

4、小會ニ於テ處理スベキ事項左ノ如シ

1、洗禮及學習志願者ノ信仰試問 信徒ノ轉出轉入ノ希望者ニ對スル薦書ノ受理及附與承認ヲ爲ス

2、信徒ノ戒規ニ關スル件ヲ處理

3、獻金收集時日及方針ヲ定ム

4、中會ニ派遣スベキ代議員ヲ選定ス

5、中會ニ提案スベキ議案ヲ作成建議ス

6、聖禮施行及聖書研究ノ時日ヲ豫定發表ス

7、日曜學校、傳道會、共聯合會及其ノ他附屬機關ヲ監督ス

5、小會々集 小會ハ三箇月毎ニ一回開催シ會務ヲ處理ス、臨時會ハ中會及牧師ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ長老二人以上連署ヲ以テ請求シタル場合之ヲ開クモノトス

6、小會々錄 書記ハ決議事項ヲ作成シ信徒名簿ト共ニ一年一回中會ノ検査ヲ受クベシ

中會

1、組織 中會ハ區域内ノ牧師（牧師一人以上ヲ要ス）及宣教師支教會ヨリ派遣サレタル長老一人宛ヲ以テ組織ス未組織教會ハ牧師ノ薦書ニヨリ勸師及傳道師ヲ以テ組織スルコトヲ得、勸師及傳道師ハ發言權ソミ有シ委員會ニノミ投票權ヲ有ス

2、職務 中會ニ於テ處理スベキ事項ハ左ノ如シ

1、中會ハ本憲法ニ從ヒ建議及一般ノ請願等委託判決ヲ受理ス

2、本區域內教會ヲ管轄シ長老及傳道師ノ試驗ヲ行フ

3、支教會設立及分立合併廢止、小會組織等一切ノ事項ヲ處理ス

4、上會ニ提出スベキ總計表及建議等上會ノ指導ニヨリ代議員ヲ選拔シ各教會ノ秩序及平和ヲ計圖ス。

3、集會・定期總會ノ期日場所及執行順序ハ其ノ開會ノ日三日前各牧師代議員ニ通知ス

臨時會議ハ牧師二人及支教會各長老一人ノ選舉ヲ以テ請求スル場合ハ會長之ヲ召集ス（但シ臨時會議ニ於テハ招集ノ目的タル議案ノ外ハ審議スルコトヲ得ズ）

大 会

- 1、大會ハ在日本朝鮮基督教會最高ノ治理會トシテ其ノ名稱ヲ在日本朝鮮基督教會大會ト稱ス
- 2、組織 各中會ノ牧師、宣教師及其ノ同數ノ長老ヲ以テ之ヲ組成ス 中會未組織地方ハ牧師及其ノ同數ノ長老或ハ傳道師及勸師協同代議員トナルコトヲ得（但シ傳道師及勸師ハ發言權ノミヲ有ス）
- 3、開會成數 中會ノ過半數及代議員牧師、長老ノ各過半數ヲ以テ開クベキモノトス
- 4、大會ニ於テ處理スベキ事項ハ左ノ如シ
 - 1、所屬各教會及治理會ヲ總察シ合法的各種ノ文書ヲ受理又ハ處理ス
 - 2、各中會ノ會錄ヲ検査ス
 - 3、憲法及規則ノ改正、教理及勸戒ニ關スル異端ヲ判斷シ牧師ノ任命、委任、轉任及勸懲ノ件、カナダ宣教會及聯合公議會ヨリ派遣サレタル牧師ニ本大會ノ憲法ヲ試問後本大會ニ入會セシム
 - 4、所屬教會ヲ統轄シ中會設立分立合併廢止其他教派モヨル教會ノ分裂爭論等ヲ處理シ内外地傳道事業及其ノ他重大事務ヲ掌ル常務委員ヲ置ク事及大會各部ニ屬セデル事項ヲ處理ス
 - 5、集會 定例總會ハ二年毎ニ一回トス
- 既定ノ時日ニ會長事故アルトキハ副會長或ハ書記之ヲ代理シ新會長選舉サル迄事務ヲ執行スベシ

〔洋教徒開拓団体等〕

前田田中義重著『朝鮮の基督教』(朝鮮文庫)

大正十二年正月三十日付

「基督教の歴史」(朝鮮文庫)

大正十二年正月三十日付

四、日本基督教団(第)第三回定期会議開催
期日 一九四二年十一月三十日
場所 大阪市東成区猪飼野大通二丁目七十三番地
主 席 在日本朝鮮基督教會獨立事件
議題 1. 朝鮮公教後者精神事件
2. 教會廢合事件
3. 教會財務整理事件
4. 朝鮮公教後者精神事件
5. 其他

五、本件を以て第一回定期會議開催を終り
日本基督教聯合會會長(假稱)是組織立
朝鮮基督教聯合會會長(假稱)是組織立
事務局下宣聖教會會長(執事)發起之人之三種
事務局百廿如右之發起人會長是開催
發起人會長是構成會長(當日出席席全空空
九月二日時 一九四二年十一月三十日前九時半
大阪市東成區猪飼野大通二丁目七十三番地
在在日本朝鮮基督教會獨立事件
4. 朝鮮公教後者精神事件
5. 教會廢合事件
6. 教會財務整理事件
7. 朝鮮公教後者精神事件
8. 其他

備考

一、不満來事奉主惟側例付准席上中食管持
己部包飯奉不可往復奉主請恩補付其請付計
九月三十日金が付付特列行奉金三十日付予付
日本基督教團東京教會内總之
日本基督教聯合會

資料VII-3

在日本朝鮮基督教連合発起趣意書

(代 開会辞：在日本朝鮮基督教連合会創立準備委員会)

1945年10月30日

日本のポツダム宣言受諾により、我朝鮮は政治的に独立が約束され、宗教的には信仰の自由が確立された。

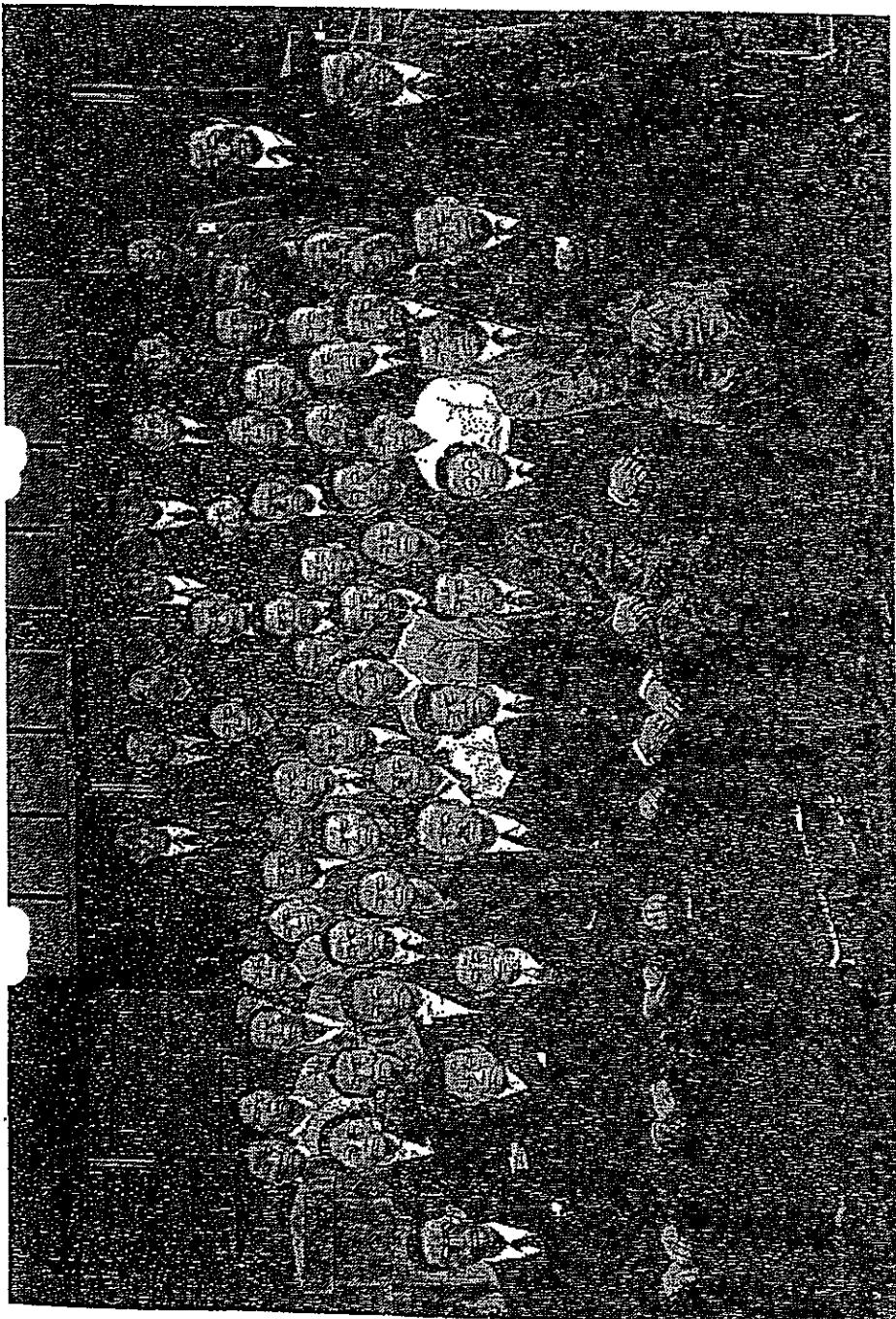
回顧してみると、我朝鮮は過去36年間日本の軍閥政治の桎梏の圧政に呻吟し、第二次世界大戦に至っては、実に塗炭の苦しみの中で、特に我朝鮮基督教会对する迫害は殉教の歴史的事実を醸し出した。日本にある朝鮮教会は、過去に朝鮮基督教宣教部とカナダ宣教機関の伝道により、各地に雨後の竹の子のように教会が設立され、疲困な労働と孤寂な生活環境にある我同胞は教会をなつかしみ信仰による慰労を受けるため集まり、我教会は長足の発展と復興を見るまでになった。

しかし時は、満州事変から支那（ママ）事変へ、また世界大戦へと進展する時であり、我朝鮮教会に対する壓迫は加重され、教会は自主性を失い、日本基督教（会）と併合するしかない措置になるや、礼拝に対する説教、讃美、聖書に至るまで日語使用を強要され、教会発展は阻害され、日本基督教各派が一教団へ合同する時、我朝鮮教会も日本基督教団に所属するようになった。

今、日本の敗戦により、朝鮮は日本の覇伴より解放されると同時に、日本に居住している我同胞の帰国は日増月加となり、朝鮮教会の利権、資産、備品は日本教会に自然吸収され、残っている朝鮮教会と教友達の存在が稀薄となると同時に、今後宣教機関の再び活動する基礎まで没落してしまう危機に至っている。そのため、在日本朝鮮基督教会在ここに連合し、教会を廃合、財政整理、教職者招請、教会復興、各文化事業等を画策する必要を切実に感じ、緊急に大同団結を要するようになり、ここに在日本朝鮮基督教連合会を発起する趣意を明らかにするものである。

在日本朝鮮基督教連合会発起趣意書文廃合辭
日本より其の宣言受諾으로 이어져 완전한 정치적 독립이 성립되었고, 종교의 자유로운 믿음을 확립되었다. 과거 36년간 일본의 군阀政治의 억압 아래에서 기르는 고생을 겪었고, 특히 제2차 세계 대전에 이르면, 조선基督教会对에 대한 학살과 함께 조선基督教会对은 전국에 걸친 활동으로 생활환경의 혹是从而立교단으로 이어졌다. 그리고 본부는 일본에 있는 조선基督教会对을 회복하는데 주목하였다. 이는 일본으로부터는 조선基督教会对을 회복하는데, 그리고 그에 대한 대체적인 존중과 함께, 일본에 있는 다른 종교 단체와 함께 조선基督教会对을 회복하는 것을 목표로 하는 것이다. 특히 본부는 조선基督教会对를 회복하는데, 그리고 그에 대한 대체적인 존중과 함께, 일본에 있는 다른 종교 단체와 함께 조선基督教会对을 회복하는 것을 목표로 하는 것이다.

(注)この趣意書は、
1945年10月30日、
在日本朝鮮基督教連合会創立準備委員会
(於：大阪東成教会の
開会辞として、康慶五
長老によって朗読され
た。)



(1945年11月15日於京都西京教会)

一九四五年十一月八日

在日本朝鮮基督教聯合會
創立準備委員長白

教會 廣中

據息安基督教會曰
平素世界政局之變動
對基督教聯合會是為
本會之創立之時機
而今被左記外加創立
會事務多蒙賜予

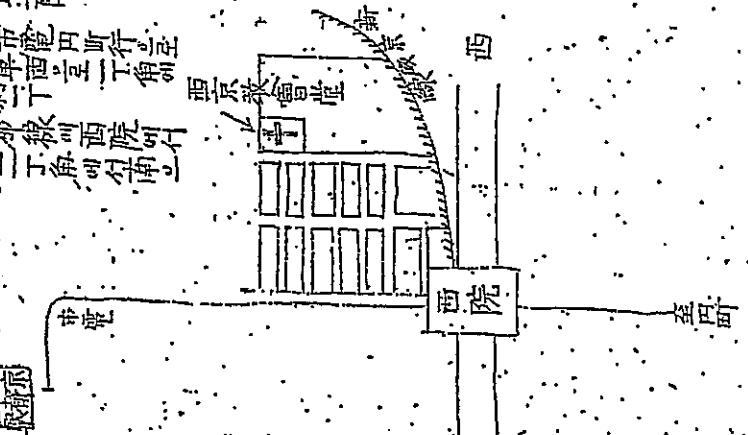
特此佈聞 記者 京都右京區西院六掛町午前九時半

集會大會

信特列講師 京都西院交番會堂
各教會會議會場請到
信特列講師 京都西院交番會堂請到
各教會會議會場請到
信特列講師 京都西院交番會堂請到
各教會會議會場請到

會場佈置及大會場所內準備委員會會場請到
會場佈置及大會場所內準備委員會會場請到
會場佈置及大會場所內準備委員會會場請到
會場佈置及大會場所內準備委員會會場請到
會場佈置及大會場所內準備委員會會場請到

京都駅付近市電円町
新宿駅下車西院二丁角
新宿駅下車西院二丁角
新宿駅下車西院二丁角
新宿駅下車西院二丁角



資料VII-6

教会状況報告 (1945年11月)

2000.4.25 李清一作成

教会名	教役者	職員		会員数				帰国希望者	戦災状況			備考 (今後維持方針)
		長老	執事	在籍会員	現在会員	平均出席	主日学生		教会	備品	教人	
雜司谷教会	吳允台 (主管者)							7	全焼	全焼	罹災者 7、家屋焼失 3	戦災後、東京中央教会と連合。信徒はほとんど帰国。単独で教会存続はできない。
京韓教会	全景渉	1	4	18	10	22		5	全焼	全焼	罹災者 12、家屋焼失 2	現在の会集会員で経費を負担し、教会は維持できる。経常費累計、約 300 円。
深川東部教会	金正中	1	1	18	13	18		2	焼失	焼失	死亡者 15 人以上、罹災者 50 人以上、家屋焼失 10	権泰岳執事宅で礼拝、この地帯を中心に伝道し、拡張すれば維持できる。
崇徳教会	李永喜 (主管者)		4	150	30	20					罹災者 43	現状維持
目黒教会	劉正斗 (代務者)	2	4	15	20	14	2	2	焼失	焼失	罹災者 2、家屋焼失 2	現状維持
東京(中央)代々木教会	沈恩澤	3		29	15	15		4				代務者：貴山栄
横浜佐野伝道所	李貞愛	2		19	9	5		全員				教会を閉鎖予定
名古屋児玉教会	朴命俊	1	2	60	20	25	0	25	無	無	無	1942 年、迫害、弾圧により教会集会は停止され、日本基督教団が管理中である。現在、集会は個人の家で持たれている。
瀬戸教会	朴命俊	5	3	60	55	60	40	60	無			帰国時まで現状維持
名古屋南教会 (名古屋教会)	赤石義明 (主管者)	3		28	28	22		全員	全焼		罹災者 11、家屋焼失 2	不動産登記名義人：L. L. Young (栄在馨)
西京教会 (京都教会)	田口政敏	6	4	78	42	60	85					自力維持
洛南伝道所	田村喜代治	4	0	22	17	15	17	11				日本教会が、朝鮮人のために設立した教会。教員全員が帰国希望なので、今後、この地域の日本人を中心に伝道。
大阪西成教会	盧震茲 (主管者)	1	3	70	30	20		15	焼失	焼失	罹災者 55、家屋焼失 11	代務者：湯谷喜一郎
東成教会 (大阪教会)	竹内信 (代務者)	4	9	320	80	60	15				罹災者 26、家屋焼失 6	
南方教会 (大阪北部教会)	森田殿丸 (主管者)	3	2	71	25	17		20			罹災者 1、家屋焼失 1	
梅井教会 (祈禱所)	辛秉鍾 (代務者)	1	3	32	19	17		17				十一条献金で維持
堺東教会	無	1	8	39	7	27	37	全員			罹災者 20、家屋焼失 4	登記名義人：吳沢寛
川西教会	十倉鉄之助 (主管者)	2	1	40	29	21		全員				
合計		40	43	1059	449	433	196	*241				

*帰国希望者の内、「全員」表記は、現在会員数として計算

声 明 書

在日韓国人北韓送還問題について、これが人道的問題として内外に大いなる紛糾を提起するに至り、日本国内に於てこれが全く政治的意図との関連を持たぬ人道的意図のみのものとして与論を喚起しているに對し、我々、在日大韓基督教會及び在日本韓國基督教青年會はその所信を明らかにし、内外の人道的思慮に訴えんとするものである。

在日本韓國人北韓送還は純然政治的問題を持たぬものとして提出されしものなれども、これに關連じ大韓民國、北韓共產政權と日本國との複雜微妙なる政治的渦中に大いなる波瀾を誘起するに至った。その動機、過程及びその結果に於て、余りにも多くの、寧ろ、その全体が政治的問題として歸結するに至った事は吾人の哀心より悲みとする處である、折角日本國の人士が人道的問題として提起せし、この問題がその焦点なる「在日韓國人の自發的要望による北韓送還」なる一点が当初より純粹性を欠き、結果に於て全く無視せられんとしている事の為に吾人の人道的思慮に反する結果となり遺憾に堪えない次第である。特に在日本韓國基督教會の信仰的立場より吾人が強く主張せんとする處は、その世界觀的問題であり。これに關連する北韓の現実を知る者として愛する儕胞を靈的且つ生存的死地に追いやる事の堪え難き事である。願はくば、眞実を眞実として世界がこれを取り上げ、凡ての國家の不利益を最少限に喰い止められ、韓日兩國の國交に新しき進展をもたらすに至らん事を切望して己まないものである。と同時にこれを機に、在日韓國人六十万の現状を全世界の人道的良心に訴え、その善処を要望するものである。

元來、韓国人の日本に移住せしは、自ら好んでの移住にあらず、日本の植民地政策による半強制的或いは強制的労働力提供によるものであった。一九〇五年韓國を日本の保護國とし、一九一〇年日韓兩國の合併を見るに至ったが、併合條約は兩國の平等の條約にも拘らず、日本は合併と同時に武斷植民地政策を行い、一九〇五年より一九一八年土地調査事業、一九二〇年より產米增殖政策と二大政策を實施するにより、韓國の農家は破産の状態に陥るに至った。一九二四年朝鮮總督府内務局社会課の農家經濟調査表によれば、純農家二、七二八、九二一戸中、破産せし農家一、二七三、三三六戸、即ち、その四六、六%とある。斯して、その生活根柢を失い農民に活路として開かれしが日本への移住であり、而して半強制的に日本へ労働力として送り込まれたのであった。その殆んどは大阪、神戸、八幡、広島、岡山、川崎等都市を中心とする工場地帯に群をなして居住し、又、各地の様々なる建設工事に労働力として居住するに至った。一九一〇年——一九三九年の三十年間に一、〇一三、五五八名が渡航し、最低の賃金を以って使役されている。一九三九年末、第二次世界戰争勃発と共に徵用として、全く強制的に移住せしめられし者、八二二、一一一名であり、北は北海道より南は九州迄到る所の炭坑に、軍需工場に労役せしめられた。今日、日本の隅々迄韓國人の居住せるはこの為である。毎日十時間以上、全く無報酬に近く、侮辱と虐待を受けつゝ駆使された。或は逃亡を妨ぐる為相内に監禁され、或は發熱を押して就役せしめられ、汗と血と生命を犠牲にして半奴隸的或いは奴隸的に日本國建設の重要な役割を果さしめられた。

終戦と共に帰國の自由を与えられたが、既にその數二一〇万となり當時北韓帰國希望者九、七〇一人にて、その他凡ては南韓帰國希望者であり、その九六%であった。それはその出生地を南韓に持っているからであった。聯合軍はこれらの人々をその自由意志に従い帰國を開始せしめ、一九四八年四月一日迄南韓帰國者公式九三七、三三三名、非公式的五十万と云われ、合計一、四三七三三名、北韓帰國者三五一名であった。

一九五〇年韓國動乱により帰國は中止され、六十万と云われる数が現在日本に居住している。これらに対し、日本政府は一九五二年法律第一二六号第二条六項に「在留資格を有することができる」と規定した。この条文により在留韓国人は根本的な差別待遇を受くる事になり、就職、就学の困難と金融、生存の制約を受け、今日、全体の八割がその生活根柢を失うことになった。

今回の北韓送還問題は、その裏に於てなされし斯る飢餓に喘ぐ者えの北韓共產政府の政治的誘導が具体的に露頭せるものといふべきである。「北韓に樂土が待つ」との宣伝は貧困に悩む者への好餌であったからである。而も、日本政府は過去の斯る非人道的行為に対して何らの人道的償いもせず、却つて人道的な美名の下に北韓共產政權の虚偽、欺瞞的な数字を取り上げ、北韓送還を敢行せんとする事はあまりにも人道に反する措置であるといわねばならない。こゝに於て、我等 在日大韓基督教會及び在日本韓國基督教青年會は切実なる念を以つて次の事を要望する次第である。

日本國民は過去に於て、日本國の建設に生命的犠牲を提供せし在日韓國人に対し、人道的見地より差別的待遇を撤廃し、優越感を捨て、眞の愛情と友好を持ってその生活の安定を保証し、社会保障と就職、就学、金融、厚生の道を開き、眞の人道的精神を斯る具体面に於て發揮される事こそ、韓日両國民の過去一切の感情を取り去る眞の友好關係の礎となる人道的緊急事である事を信じ、これを切に要望して、全世界人士の人道的良心に訴え、声明とする。

一九五九年三月十日

在 日 大 韓 基 督 教 會 總 會

<標語>

그리스도를 따라 세상으로

キリストに従ってこの世へ

Forward! Following Christ into
the World

宣教 70周年을 향하여

宣教三大目標 (1968~78)

1. 教會에 革新을

먼저 안에서 새로워지며 성기는 종의 자세를 갖추게 한다

2. 同胞社會에 變革을

나가서 서로 和睦하게 하며 健全한 社會建設에 貢獻하여 民族의 莳이 되게 한다

3. 世界에 소망을

만민에게 그리스도의 주권을 증거하며 참 이웃이 되게 한다

宣教 1968~78 実踐目標

1. 补助教会는 自立教会를 自立教会는 開拓伝道에 注力한다.
2. 우리同胞가 大都市 中心으로 集中되어가는 宗情을 把握하여 開拓伝道를 成果実踐하여 諸은 同胞가 福音에 접촉될수있는 機会를 만든다.
3. 教會間의 教役者 交替을 도모하여 伝道局 教育局 青年局 婦女局에는 主事等을 두므로 新宣教 体制를 確立한다.
4. 모든 年令層과 職業層이 信徒運動을 活潑하게하고 이를 推進하기 위하여 基督教會館(K.C.C)을 建設한다.
5. 福音新聞 伝道紙 在日大韓基督教會歷史 記念論文集等을 發刊하므로 文書活動을 積極 推進한다.
6. 教會는 地域社會의 모든 生活領域에 積極 參与하므로 社會變革에 貢獻한다.
7. 宣教研究機關은 地域社會 全般의 問題를 研究하여 各界 各層과의 對話を 도포한다.
8. 同胞外 地域社會를 위하여 幼稚園 学園 学生센터 寄宿舍 地域社會를 센터養老院 共同墓地를 建設하고 既成學園 한센外病院 其他기관에 협조한다.
9. 同胞 青少年 指導 育成에 尽力한다.
10. 世界 이웃民族에게 宣教師를 보내는 教會가 된다.
11. 教會一致 運合宣教를 위하여 世界 및 地域 基督教機關과 緊密한 連絡을 가지며 特히 視聽覺教育 產業傳道 其他方面에 協同 推進한다.

資料VII-14

「在日大韓基督教會の社会的責任に関する態度表明」

在日大韓基督教會第26回総会に参加したわれわれは、主イエス・キリストの召しをうけ、日本社会で福音を証している。

今日、日本の特殊な社会状況の中で、在日韓国人61万民族が、将来の方向を模索しているこの時にあたり、われわれは最近おこりつつある事態に深い関心を寄せつつ、以下のごとく、われわれの社会的責任に関する態度を表明するものである。

1968年、われわれは在日大韓基督教會宣教60周年を迎、「キリストに従つてこの世へ」なる標語をかけ、これを記念してきた。この標語が意味し向いているところは、過去われわれの教会が歩んできた歴史を導き給う神の原理のみ業を感謝しつつ、われわれの宣教の基本的姿勢が、福音信仰の帰結として、キリスト者は、その生きている社会に変革をもたらすべき責任ある役割を担っていることを確認したことにある。われわれは、今まで歩んできた過去を反省する時に、社会においてキリストを信する者としてふさわしい証しの生活をなしえなかつた怠慢を率直に告白する。

今まさに、在日韓国人61万同胞はそれぞの政治的立場に立ち、永住権獲得、国籍変更運動等を展開しつつ、将来の道を模索している。われわれ在日韓国人キリスト者は、61万同胞がこの国に居住するようになった歴史的背景と、同胞がいかに多くの血と汗を流してこの社会で犠牲となり、また貢献してきたかを顧みる時に、永住権は、在日韓国人61万のたれかれを問わず、付与されるべき正当な権利であることを主張すると同時に、この付与されるべき永住権が、在日同胞の要求する内容に合致するものになるよう積極的に努力し、推進することを期するものである。

われわれ在日韓国人キリスト者は、和解の福音を信ずる者であるが故に、民族の統一と、同胞が一致団結し前進する方向に深い関心を寄せている。したがって、永住権獲得運動が、政治的事情その他の理由のために、その権利を与えられずにいる同胞たちに極端な差別がもたらされるであろう事態を憂慮し、このようなことがおこらぬよう、キリスト教的正義と愛の立場から発言すべきであることを表明する。

われわれは、この國に住むキリスト者として、日本國家の動向にも深い関心を抱き、歩むべき方向を模索しているこの國のために、とりなしの祈りをささげなければならない。

特に現在、靖国神社国営化法案と、出入国管理法が次の通常国会に上程されるかも知れないとの消息を耳にする時、過去、この國が韓国をはじめとするアジアの諸民族との関係の中で持つてきた不幸な歴史が、再びくりかえされぬよう切に願わざはおれない。

ことに、出入国管理法が、在日外国人—その大多数を占める在日韓国人の基本的人権を保障し、神により創造された人間の尊厳性と自由を保証しないならば、われわれはこの法案に全面的に反対すると共に、政治的・社会的ないかなる差別体制をも変革していくことこそ、キリスト者の使命であると再確認するものである。

われわれは、去る6月に臨時総会を開催し、都市化過程の中で在日韓国人が最も多く集中している大阪に、「地域センター」(KCC)建設を決議した。莫大な財源と人材を動員するこの事業も、われわれが住んでいる地域社会に対し、責任ある参与をしようとする行動のひとつと見て、積極的にこれを推進するものである。

われわれは、まことに小さき群れであるけれども、イエス・キリストが歴史の主でありたもうことを信じ、この現時点、在日韓国人同胞が置かれている状況のまつた中で、われわれを召したもう全能の主に応答していくとともに、福音宣教と社会に仕える使命をおび前進できるようにと、主のみたすけを祈りつつ、在日61万同胞とともに、未来に向かってさらに創造的な歴史形成をなさんことを表明するものである。

1970年10月15日
在日大韓基督教會第26回総会議員一同

資料VII-13

過日の日本政府の閣議によつて、近々、國会に上程されようと
している出入國管理法案に対して、わたしたち在日大韓基督教會
総会は、たゞ單に、在日外国人としてのみならず、キリスト者と
しても、多大の憂慮を覚えずにはおられないであります。
わたしたちは該法案を慎重に検討した結果、その内容と基本精
神は、在留外国人を保護するという近代國際通念とは逆に、その
活動の規制を強化し、抑止しようとする意図をもつて、從来の日
本出入國管理令を改悪立法化しようとするものであるのみなら
ず、基本的人権を侵害する危険性が多分にあることを憂慮し、キ
リスト教精神の立場からも黙していけることはできず、ここに本教
會は該法案の内容に対して絶対反対するものであることを声明し
ます。

一九六九年四月一六日

在日大韓基督教會総会
総長 呉允合
東京都新宿区若宮町二四
電話 二六九一一九〇九

一九六九年四月一六日

在日大韓基督教會総会
総長 呉允合
東京都新宿区若宮町二四
電話 二六九一一九〇九

日本出入國管理法案反対声明書

靖国神社法案反対声明書
この度、自民党が靖国神社の国営化をはかり、國会に法案を上
程しようとするに際し、在日大韓基督教會は、以下の所信を表明
するものであります。

本来、宗教は個人の自由において尊崇されるべきものであり、
国家が強制なし、干渉してはならないものであります。従つて
靖国神社の国営化は國家宗教の制定につながり、「信教の自由」
を否定するものであります。

さらにわたしたちは、第二次大戦中日本の軍國主義が、國家神
道を背景として、アジアの侵略にのり出し、「神社參拜」問題に
よつて韓国教会の「信仰の自由」が抑圧され、教会の本質さえも
危険に瀕せられたことを想起するものであります。今回の靖国神
社の国営化は、かつての過ちを再び繰返す危険性を隠していると
考えられるので、わたしたちは、ここに強く反対を声明すると共
に、日本がアジアにおいて、自由にして、民主的な平和國家とし
て進むことを希望するものであります。

宣 教 基 本 政 策

前 文

在日大韓基督教會總会（以下「總会」と略称する）は、韓民族の国家的悲劇が始まった今世紀初頭以来、祖国を離れ日本に居住するに至った同胞の中において、共にいましたもい主なる神の御旨により形成された教会である。同時に總会は、民と共に歩みの中で、その存在を明らかにしてきた。

總会は、同胞と共に、日本帝国主義の隸屬下における耻辱と、そこから解放された栄光を分かちあう中に、その歴史を積みかさねてきた。勿論、その歩みは、必ずしもすばらしい歩みばかりではなく、時には辱しめと屈辱のそれであった。しかし、それにもかかわらず、總会が志向し、また前進せんとした動機は、いつであれ、彼らの主イエス・キリストの福音にあつたのである。なぜならば、まさにこの主が、民の辱しめを御自身のそれとして身に受けられ、人間の解放のために受肉されたのであり、總会はこの出来事に己れの存在根拠を置くからである。

今日、總会が困難な状況下にあって生きてこえる宣教の拠点を形成し、日々に成長しているのは、まさに、總会が志向するところを感じさせて下さる神の恩寵の御業と先達たちの労苦と犠牲によるところなのである。それ故に、われわれが總会の過去と現在と未来を思う時、何よりも先ず、われらの主なる神に感謝せねばおれないものである。

けれども、今この時点におき、總会の宣教の業へと召しを受けたわれわれが、その宣教基本政策を樹立せんとするにあたって、われわれは先ず、主なる神と同胞の前に救しを送わねばならないのである。ことに、わが民族が「日帝」支配の下から解放されて以後、今日に至るまで、われわれはわれわれに与えられた機会を最大限に生かして歩んでこなかつたのみならず、祖国を離れ、この日本の地に生きると云々特殊、かつ複雑な状況のもとにあつて、われわれは、歴史の流れに対する深い洞察を持ちえなかつたのである。

解放直後、各地に散在する信徒たちを集め、教会を再建する業に没頭するあまり、変革と新しい形成をなすべき時期にあつた民族の苦悩を、己れのそれとして担うことをしてこなかつたのである。

教会の使命は、教会固有の使命を果そぐとする時に生きるものとなり、そしてその使命は生命が燃焼する時に遂行されるのである。われわれは、こうした教会の「生命」と「使命」の関連性をないがしろにしてきた総会の姿を自らのうちに見いださねばならない。召しを受けた歴史状況に正しく応答であります、自己保存に汲汲となる時、教会はその生命を失つていくのである。総会の中にこうした点に起因する教勢不振、青年運動と教会学校の衰退等の現実をわれわれは見ることができる。更にまた、われわれの教会にあるこうした病的自己保存の姿勢のゆえに、同胞たちの生の領域から教会は疎外されてしまい、民衆のため建てられた教会が、同胞社会の苦悩の中心から目をそらしてきたことも事實であった。それ故に、一九六八年宣教六〇周年をむかえて「キリストに従つてこの世へ」という主題のもとに教会革新をはかつてきるのである。

われわれは今、主イエス・キリストが召したもうその原点に立ち帰らんがために、徹底した悔い改めをなさねばならない。そして、この世界と全人類のために十字架の苦難を甘受したもうた主イエスのみあとに従うことにより、自己保存的・自己中心的教会主義を克服しつゝ、復活の主の力を身におび、遣わされた場へとかけ参じていかねばならない。そしてもし、その遣わされた場が、今日日本に流浪し、旅人としての生を日々生きている同胞の中であるならば、われわれは今一度この民族と苦難を分かちあい、その生が福音のさししめすところの解放を得るために戦わねばならないのである。

基本的課題

総会の宣教の使命には、一つの課題がある。また、二つの原理の相関関係により形成されるさまざまな実践的課題が、統一的に理解されねばならない。

第一、総会は復活の主イエス・キリストが語られたところの「地の果てにまで行きわが証人となれ」との命令に応答する教会にならねばならない。この使命を正しく遂行するために、われわれは、わが同胞の散在している

日々にまで福音の光をかけていかねばならない。同時に、われわれは、わが民族がまつたき人間として生きる教いの業に、最大の関心を払わねばならない。

第二、総会は、神が支配したもう終末論的歴史の中に置かれている。しかし、この現実の歴史は、いまだにあらゆる悪がさまざまな形態を取つてその力をふるつてゐる舞台でもある。この日本社会にあつてわが民族が、政治的・社会的・思想的抑圧を受けている現実もその一面であるといえる。そして、そこでの救いの現実とは、民族の「生」における全領域が、こうした抑圧から解放されることである。

ここからわれわれは、上述のような終末論的歴史観に立つてキリストによる教い、わが同胞の人権擁護と福音問題とが、福音宣教の業と全的関係を持つてくるのだとの理解を、われわれの総会における宣教基本政策の基本的姿勢としてとるものである。

このことはまた、キリスト者の生のあり方におき、信仰と愛による行ないと分離できない統一と調和の関係としてあらわれ出るものである。われわれは、この両者を切り離し、その一方だけを強調しようとする神学は、傾向性をおびた神学として警戒せざるをえないものである。一九七一年度第27回総会は、上述のような基本的課題を担つて前進せんがために、総会の三つの職務である「伝道」「教育」「奉仕」に立脚し、それぞれ「伝道」「教育」「社会」の三大活動部門を設置する機構改革を行なつた。このたびのこの宣教基本政策も、それに従つて具体化されることが緊急に求められているのである。

伝道

(1) 一九六八年宣教60周年を契機に試みられた〈福音が宣べ伝えられていない地域への開拓伝道〉は、ひき続き推進されねばならない。

(2) 日本社会の都市化に伴なう同胞人口の動態に立脚した教会配置と、多様化されていく社会生活の中にある同胞たちに対する共同牧会を試みる必要がある。

(3) 人間関係が疎遠になつていく現代社会にあって、民族性をもつて喪失しつつある同胞の結びつきを強固に

するため、同胞が比較的多く集中して居住する地域の中心に教会堂を建て、同胞を多く集める」と同時に、その週辺地域に「家の教会」を形成する必要がある。

- (4) 信徒全体にて宣教のため組織的訓練と使命感を高めることを通して、その機能に応じて多様性ある宣教（文書・戸別訪問・産業・病院・学園等における）に参与させるよう努めること。
- (5) 以上のことより信徒全員の働きを通して、一九七〇年代には最少限一万名の信徒の教会へと成長して行かねばならない。それ故、各個教会は支部教会有るいは家の教会（伝道所）を設置する」とに全力をあげること。

教育

(1) 総会の教育理念は、主なる神から附与された人間の可能性が実現され、恩寵の下にある生を直覺させるその過程に基盤を置き形成されるものである。従つてこれを阻止するいかなる抑圧形態であれ、束縛状況であれ、われわれには、人間解放の業のゆえに、戦いの課題となるのである。「在日同胞」の場合、日本社会とそこにおいて受けける教育のゆえに失なわれていく民族の自主性（「自己同一性」と、人間としての主体性の回復が、われわれの緊急な課題になるということである。キリストの福音には、われわれの置かれた状況の中で、こうした自己回復をなさしめる力があるのである。

(2) こうした教育理念に立脚したカリキュラムを作り、神の恵みとキリストの救いによる人間の真の自由と解放の福音とを中心にして、民族の歴史と文化の教育を、その枠として形成する。かくして、まことの自由を発見し、神と隣人との関係において正しく自己自身の場へと赴き行くことが可能となるのである。

(3) 教会教育を通して、信徒の生涯教育の基礎を確立せねばならず、同時に礼拝と祈りに注力するのみならず、教会をより広い教育の場として考えねばならない。

(4) 教会における職務を担う指導者（教職者と信徒）の養成と再教育のため、指導者養成基金を作り、全教会がその育成の業に力を注ぐ必要がある。

(5) 総会は、既成民族学園との関係を各方面において樹立することと併せて、直営の学園新設を研究し、保育事

業を奨励しつつ、教育を通しての福音宣教にもあとおこす必要がある。

奉仕

(1) キリストの生涯とその救いは、自己否定と犠牲的奉仕を媒介として成就された聖なる業であり、キリスト者はその主のみあとに従いまつた群れである。キリストの愛は、あらゆる場合において人間を完全に回復せんがためにならず、奉仕の努力もあるといふよ。在日60万余の同胞たちが居住する今日の日本社会においての総会の先ずなすべき奉仕活動は、抑圧されている同胞たちの基本的人権の回復の業として、あらわれねばならない。

だからわれわれは、各方面において、社会活動を推進せねばならない。社会正義の確立のためにねばならない。の活動は、福音を証しする具体的行動と関連づけられねばならない。

(2) KCC（大阪韓国基督教會館）は、総会が摸索している社会奉仕のひとつの一象徴である。それ故に、これは大阪生野地区に限定される運動ではなく、今後各地域において同じようになされるべき運動である。この運動は「在日」韓民族の基本的人権の獲得と、住民の福祉向上と、少数者の権益擁護のため「よきサマリヤ人」としての奉仕活動を、その趣旨とするものである。

(3) 祖國統一は、われわれ五千万同胞の悲願である。総会は、祖国を離れて生きる「在日同胞」たちに仕えるべき立場にあると共に、海外に住むという条件を生かして、祖国の南北統一と和解をなしとげるために何らかの貢献をすべき責任を担っている。それ故に、自由と正義が貫徹された民主政権が、統一された祖国に樹立されんがための祈りとあらゆる奉仕の努力を注ぎ出すものである。

(4) 総会は、61万同胞が、日本に居住するに至った事実に関して、日本の近代化の過程において、くりひろげられてきたアジア侵略という不幸をわまる歴史の因果関係の中において、その政治的、經濟的因素と結果を明らかにせねばならぬ。だが、歴史を單に因果関係としてだけ解釈するのではなく、神が御業をなされる舞台として、理解するものである。だからこそ、この地に生きることを感謝しつつ、われわれの存在が、日本社会をして、主なる神の望みたもつ歴史の方向へと止揚させていく役割をなすべきであることを誇りとするのである。そこにお

き総会は、人間と歴史に対する預諸的活動、祭司的活動が、両民族の自主的な親善関係を結ぶにあたり、貢献するものをもつといえるのである。

(5)総会は、在日同胞の諸団体との対話と共同の活動を模索する中で、社会的奉仕と、民族的経済の強化につとめるものである。

自立と協力関係

総会は、日本社会におき、今なお働きだもつ主イエス・キリストの召しに応えるべき主の弟子の群れである。それ故に、われわれが、自分に与えられた使命を遂行し、上に述べた全ての課題を担いその目的とするところを成就するためには、総会の主体的決断とその姿勢が先ず確立されねばならない。これをなしとげるために、われわれは、われわれの人材とあらゆる資源を主の祭壇にささげねばならない。

総会が、主体性を確立すると、うのは、卓犖孤立を宣言するということではない。キリストの教会は、普遍的意味における《聖なる公会》を告白する群れであるから、われわれは必然的に、世界教会の一肢体に連なるわけなのである。

総会の今日に至るまでの歴史を振り返る時に、母国教会が、われわれのために働き人を派遣してくれたし、また、カナダ長老教会との長い宣教関係も、総会の世界教会との協力を物語るものである。けれども、この時点におき、過去の宣教関係を整理し、新たに結ばれるところの宣教関係が、20世紀の世界教会運動がもたらした豊かな成果を反映させねばならない。

現代の世界宣教は、教会の相互関係を通じて、神の御業に参与することにより遂行される。宣教のための教会の相互関係は、宣教地に置かれた教会の主体性を互いに尊重しあうことを通して確立される。19世紀の派遣教会が主導した宣教関係は止揚され、遣わされた人材や資源が、派遣される教会におき統合されねばならない。

総会が、こうした場を持つ教会へと成長したことを神に感謝すると共に、われわれが、帶びている主体的責任を再確認せねばならない。また、われわれは、無制限に姉妹教会の人材と資源に依存することはしまじ。むしろ、

われわれが担い切れぬ困難なまた、緊急を要する領域における宣教協力を期待しているのである。

われわれは、世界教会運動を、教会の一一致と、福音をその置かれた地域において証しして行く課題として受けとめる。総会が、母国諸教会と深い紐帯をもち、日本NCC（キリスト教協議会）CCA（アジア・キリスト教協議会）WARC（世界改革教会連盟）WCC（世界教会会議）に加盟し、今日の教会の生命と使命を分がちあつてはいるのは、まさに「」ことを意味する。われわれは、宣教の相互関係を確認することにより、宣教協力を受ける教会にとどまるのではなく、われわれ自身が、その受けし神の賜物を、世界教会と共に持つて行く教会へと成長せねばならない。

われわれが、一九七三年初めにJNAC（日本・北米両地域宣教協力委員会——日本キリスト教団・北米教会・カナダ諸教会が会員）に加盟したのは、他の地域にある教会と、神の恵みを互いに分かちあいつつ、同一の経験をもつ教会との共同の使命を担つているべき道を模索せんがためであった。

結論

神の宣教は、聖靈の働きにより実を結ぶに至る。われわれが、どのような政策を樹立するとしても、それが聖靈の器として用いられることがなくば、何の意味もない。それ故に、ただこの時点では、三位一体の神の聖なる御旨が、われわれの中に豊かに成就されていくことを祈りつつ、各々受けしところに従つて、聖靈の大きな恵みとその経験を、喜びをもつて証しして行かれる群れとして成長する」とを祈り、ひたすら、主に心と体とをもむげたく思うものである。マラナ・タ（主よ、来たりませ）！

日本基督教団と在日大韓基督教会総会との協約

I 序

日本基督教団と在日大韓基督教会総会は、1984年2月8日をもってそれぞれの教会の歴史とその独自性にたって、より深い教会の交わりと宣教協力関係を樹立する。

日本基督教団は、神のみまえに、在日韓国人キリスト者たちとその同胞に対する戦前、戦後にわたる罪責を告白し、今日の在日大韓基督教会との協約締結を感謝する。教団は、第2次世界大戦下にみずから戦争に協力するのみならず、在日朝鮮基督教会を、主体性を奪ったまま日本基督教会の一部分として教団に組み入れ、日本帝国主義の戦争への協力を強制した。戦後、在日韓国キリスト者たちが教団から脱退して、在日朝鮮基督教連合会（のちの在日大韓基督教会総会）を形成していったとき、教団はこれを真摯に受けとめることをせず、また1967年の「戦争責任告白」にもとづいて韓国3教会と協約を締結するときも、仲介の労をとられた在日大韓基督教会に対しては、謝罪の上に立った協約を結ぶこともなく今日に至っている。われわれ教団は、日本が戦前戦後を通じてアジア諸国の人々を抑圧していることを認識し、国内外を問わず、この抑圧下にある人々とその教会への責任を覚え、在日韓国・朝鮮人問題を受けとめてそれに取り組み、在日大韓基督教会との言葉とわざによる宣教協力をその課題とすることを決意する。

在日大韓基督教会は、苦難と迫害の70年の歴史を歩んできた。本国の教会は、殉教の死をもつて帝の暴政に抵抗した。在日大韓基督教会でもさまざまな抵抗がなされたにもかかわらず、徹底性を欠いた。さらに1941年日本基督教團発足にさいして、一方的に強制編入させられた事実について、解放後真剣な悔改がなされていない。1945年以後、在日大韓基督教会は、独自の宣教のあゆみをはじめるために日本基督教團を脱退し、今日に至っている。さまざまな弱さを負いつつも、在日大韓基督教会は帝時代と変わらぬ差別と抑圧をうける同胞に対して、キリストの福音の宣教を通じて救いを働き民族主体性の確立に努めてきた。解放後、日本基督教團とは、これまでエキュメニカルな場で、福音宣教の業に共にたずさわってきたこともあったが、宣教協約締結の必要性を認識するに至らなかつた。しかしこの度両教会が宣教協約を締結することは、両者の和解の実を結ぶはじめであり、日本における福音宣教に新しい次元をつくりだすものと信じる。

両教会は旧・新約聖書にもとづいて主イエス・キリストと共に告白し、相互の信仰告白（信条）と教憲教規（憲法）を尊重するところにその教会的交わりの基礎をおき、更に密接な相互関係を進めることに合意した。

以上の合意にもとづいて両教会の関係が教区（地方会）、各個教会相互の間において進められることを願いつつ、以下の協約を結ぶものとする。

II 協約

1. 日本基督教団と在日大韓基督教会はそれぞれの職制と聖礼典を相互に認める。
2. 日本基督教団と在日大韓基督教会は可能な限り各方面での宣教協力を約する。
3. 日本基督教団と在日大韓基督教会は特に在日韓国・朝鮮人の人権問題へのとりくみについての協力を約する。

III 実施要綱

1. 以上の協約を推進するために協力委員会を設置し、少なくとも年1回の会合を開くこととする。この委員会の招集者は両教会の総会議長（総会長）とする。
2. 交流の窓口は、日本基督教團総幹事と在日大韓基督教会総会総務とする。
3. 教区（地方会）、各個教会レベルでの交わりと宣教協力の推進の為に、両教会の合意の下に「指針」を作成する。
4. この協約はそれぞれの教会の総会の決議を経て発効する。

IV 運用規定

1. 両教団の一方に属する教師が、他方にその教師籍を移転しようとする場合の資格審査は、それぞれの教憲教規または憲法に関する試問にとどめる。（日本基督教團教規131条、在日大韓基督教会憲法第19条）
2. ただし、教師籍移転志願者は、それぞれの所属する教団の承認を得るものとする。

在日大韓基督教会総会와 日本基督教団과의 協約

I 序

在日大韓基督教会 総会와 日本基督教団은 1984년 2월 8일 계각기의 教会의 歴史와 그 独自性에 입각하여 보다 깊은 教会의 교제와 宣教協力 関係를樹立한다.

日本基督教団은 하나님 앞에서 在日韓国人 그리스도인들과 그同胞에 대해 戰前戰後에 걸친 罪責을 告白하며 오늘의 在日大韓基督教会와의 協約締結을 感謝한다. 教団은 第二次世界大戦下에 있어서 스스로 戰争에協力を했을 뿐만 아니라 在日朝鮮基督教会의 主体性을 배인은체 日本基督教会의 한부분으로서 教団에 가입시켜 日本帝国主義의 戰争에의 協力を強要했다. 戰後 在日韓国人 그리스도인이나 教団에서 脱退하여 在日朝鮮基督教連合会（오늘의 在日大韓基督教会）을 形成하였을때 教団은 이를 진지하게 받아들이지 않고, 또한 1967년 「戦争責任告白」에 입각하여 韓國3教会의 協約을 締結할 때도 증개의 역할을 한 在日大韓基督教会에 대해서는 謝罪하는 듯에서 協約을 맺지도 않고 오늘에 이르렀다. 우리 教団은 日本이 戰前戰後를 통해 아세아諸國의 사람들을 抑圧하고 있음을 认識하고 国内外를 막론하고 이 抑圧 아래 있는 사람들을 그 教会의 責任을 느껴 在日韓國·朝鮮人問題를 받아들이고 이를 강당하여 在日大韓基督教会와의 밀습과 행위에 의한 宣教協力を 그 誓愿로 삼을 것을 決意한다.

在日大韓基督教会는 苦難과 迫害의 70년의 歴史를 걸어왔다. 本国教会는 残教의 죽음을 가지고 日帝暴政에 抵抗하였으며、在日大韓教会도 여러모로 抵抗해 왔으나 徹底性이 결여했다. 더욱이 1941年 日本基督教團発足에 있어서 일방적으로 強制編入당한 사실에 대해 解放後 脱退 慎改가 있지 않았다. 1945年 以後 在日大韓基督教会는 独自의 宣教의 결음을 為하기 위해 日本基督教團을 脱退하여 오늘에 이르렀다. 여러모로 악함을 갖고 있지만 在日大韓基督教会는 日帝時代와 변함없는 差別과 抑圧을 받는同胞에 대해 그리스도의福音의 宣教를 통해 구원을 얻기 위해 民族主体性의 確立에 노력해 왔다. 解放後 日本基督教團과는 지금까지 에큐메니칼 運動關係에서福音宣教의 사명에 함께 참여해온 일도 있었으나 宣教協約締結의 必要性을 認識하기에 이르지 못했다. 그러나 이번 両教会가 宣教協約을 締結하게 됨은 両者が 和解의 협약을 맺는 시작이며 日本에 있어서의福音宣教에 새롭운 차원을 만들어 내는 것으로 믿는다.

両教会는 旧・新約聖書에 입각하여 主 예수·그리스도를 함께 告白하며 相互의 信条（信仰告白）와 憲法（教憲教規）을 尊重하는데 그 教会의 교제의 기초를 두며 더욱 더 밀접한相互關係를 추진함에 合意했다.

이상의 合意에 의해 両教会의 関係가 地方会（教区）各教会의 相互間에 추진될 것을 바라면서 다음과 같이 協約을 맺는다.

II 協約

1. 在日大韓基督教会와 日本基督教団은 계각기의 職制와 聖礼典을 서트 인정한다.
2. 在日大韓基督教会와 日本基督教団은 가능한한 각방면에서의 宣教協力を 약속한다.
3. 在日大韓基督教会와 日本基督教団은 特히 在日韓국·朝鮮人の 人權問題를 다루는 難協力を 약속한다.

III 実施要綱

1. 이상의 協約을 推進하기 위해 協力委員会를 設置하고 적어도 年1回의 모임을 갖기로 한다. 이 委員会의 召集者は 両教会의 総会長（総会議長）으로 한다.
2. 交流의 窓口는 在日大韓基督教会 総会總務과 日本基督教団 総幹事로 한다.
3. 地方会（教区）各教会レベル의 교제와 宣教協力의 推進을 위해 両教会의 合意아래「指針」을 作成한다.
4. 이 協約은 계각기의 教会總会의 決議를 거쳐 發効한다.

IV 運用規定

1. 両教団중의 한편에 属하는 教役者が 다른 편에 移籍하려고 할때의 資格審査에 있어서는 各教団의 教憲教規 또는 憲法에 関한 試問단으로 한다(在日大韓基督教会憲法 憲法第19条, 日本基督教團 教規131条)
2. 단 教役者중 移籍志願자는 各各 所属教団의 承認을 얻어야 한다.

宣教協力にあたつての指針

在日大韓基督教教会
日本基督教団

に、直教、伝道、社会、教育などの
委員会レベルで協議会を開催するなど
文部省を深めらる。

Ⅰ 文

日本基督教団と在日大韓基督教教会は1984年に協約を締結した。協約を実質にするために、両教会の宣教部委員会は協議を重ね、1986年、「在日大韓基督教教会と日本基督教教会の宣教協力にあたつての指針」を作成し、協力を強めた。両教会は宣教協力と在日韓国・朝鮮人の人権問題への取り組みを軸にして進んでいた。

各個教会、教区、地方会は合同礼拝、合同研修会、人権問題など様々な取り組みと共にアドバイス、協力を実現化した。

在日大韓基督教教会の開拓伝道にあたつては、日本基督教教会の協力（会の使用など）が在日大韓基督教教会の大きな力となってきた。また外国人基督教法の改正運動の取り組みは一定の成果をおさめ、それがエキュメカル運動に大きな役割を果たしたといえよう。

その中で、在日大韓基督教教会の直教は、「直教協力基金」は、両教会にかかる重要な役割を果たしたといえよう。

それを踏まえて「指針」を改訂する。新たに「指針」に「日本基督教團と在日大

基督教教会の協力」を加え、また、「直教協力基金」の下に「直教協力実務

基盤会の運営などを規定する。

日本基督教団と在日大韓基督教教会は、在日大韓基督教教会の代表を招き、会の運営をめぐる重要な議題を討議する。また、「教団新報」を日本基督教教会の各教団に送り、在日大韓基督教教会の情報を知らせることとする。

日本基督教団と在日大韓基督教教会は、在日大韓基督教教会の代表を招き、会の運営をめぐる重要な議題を討議する。また、「教団新報」を日本基督教教会の各教団に送る。

具体的な宣教課題を共有するため

育局、青年局等) 及び専門委員会(世界宣教委員会、廣報委員会、教会学校委員会等)での交流を計る。

4. 両教会は日本のみならず、アジアや世界で使命を果たすために、共同して世界宣教の在り方や課題を検討し、責任を果たす。
5. 在日韓国・朝鮮人の人権問題、移住労働者や短期滞在を中心とする外国人の人権問題に共に取り組む。
6. 宣教方策会議、牧会者共同研修会などに取り組き、交流をする。
7. 両教会の活動交流の報告の記録を互いに分かち合う。
8. 在日大韓基督教教会は「東京総会挙学機」の発展と共に協力する。
9. 在日大韓基督教教会の100年史等で日本に来て生活している女性及びその家族への福音宣教に在日大韓基督教教会総会と共に取り組む。
10. 韓国及びアジアから労働や国際結婚等で日本に来て生活している女性及びその家族への福音宣教に在日大韓基督教教会総会と共に協力を求める。
11. 在日大韓基督教教会の100年史等のため、在日大韓基督教教会総会に開拓する以前、歴史的歴史資料の提供と共に協力を求める。
12. 総会は、韓国及びアジアから労働や国際結婚などで日本に来て生活している女性及びその家族への福音宣教に取り組む。

13. 地方会と教区、地区(支区)の協力
 1. 教区総会、地区(支区)総会に地方会の代表を招く。
 2. 宣教協力のための委員会を設置して宣教協力と交流を促進する。
 3. 地区(支区)は在日大韓基督教教会総会が進めている宣教の拠点づくりの観点、交渉に協力する。また、教団教会堂の使用の実情があつた場合には積極的に協力する。
14. 個別会、女性の集会、研修会、研修4. 青少年会、女性会、信徒会、牧師会等

(第26回(1996年12月2日) 日本基督教団と在日大韓基督教教会総会との直教協力委員会で確定)

- IV. その他、今後取り組むべき共同の課題
 1. 教団附属学校における在日大韓基督教教会の教職養成のための配慮。
 2. 日本の学生・生徒が日韓関係史、在日韓国・朝鮮人の問題を正しく認識できる教育。
 3. 在日韓国・朝鮮人などとの共生の社会をめざす神学校の確立。
 4. 民族的和平及び和解問題。
 5. キリスト教団体・組織などにおける在日韓国・朝鮮人の就職の問題。

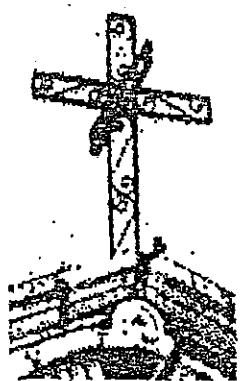
等に在日大韓基督教教会の人々を招き、特に子ども、青年の交流を進めること。また日本基督教教会との合同礼拝、聖餐式、文説会、連合クリスマス集会等) を開催する。また、共同教師研修会等を開催する。日本基督教教会の教団は、在日大韓基督教教会と人権尊重にむけ取り組む。定住外国人の基本的人権に賛同する、削除の確認に向けた学習会や運動を実施する。

7. 地方会、教会レベルでの学習会を開く。(教団の歴史と礼拝、聖餐等)。

Ⅲ 各教会の協力

1. 相互に主体性を持つて宣教(協力)の業に努み、相互の伝承、合祀礼拝、伝道集会、修業会、女性・青年集会、子ども夏期学校などを積極的にする。
2. 各個教会の開拓などを通じて、日本基督教教会の情報を探る。
3. 日本基督教団の教会との交わりを行い、開拓文書、合祀礼拝、伝道集会、修業会、女性・青年集会、子ども夏期学校などを取り入れるよう働きかける。
4. 日本基督教団の教会の教會学校のプログラムの中に、在日韓國・朝鮮人の歴史・現状、および韓国の人権問題の講義や音楽等を取り入れる。

5. 日本基督教団の教会や市民グループと協力し、相互の文化交流を持ち、地域社会での共生を求めて地域社会に貢献する。



民族統一と課題の在日大韓基督教会総会

52

〔解説 在日韓国教会は、古くから南北、民族統一と課題を抱かる言葉を採択した。韓国教会は、七〇年一八〇年代の民主化運動を強化して、南北分断こそがこの民族の最大の苦痛と不幸の原因として、民族統一が緊急な課題としていた。こうした民族と統一運動が一つに合流され、大きな流れとなりて韓國南北は統一に開かれる宣言文を採択するに至った。在日韓国教会は、その理由を立場から統一運動に參與してきたが、本宣言文はそのKNCOC宣言に呼んで、組織された。また在日韓国同胞の和解と統一を掲げ、そのための在日同胞の共同基盤に、(1)韓民族の末裔、(2)日本社会の被差別階級、(3)その差別の克服を上で、朝鮮半島民族と帰化同胞との和解と統一運動を進めると共に、民族差別問題への共同の取組みを通して、日本人との和解をねらし、あるいは、祖国の南北統一と、ひいてはその原因となりてくる世界の東西陣営の分野の保全と統一を指向した歴史的声明である。〕

福音と世界 新教出版社

1988年10月号

おなじみの文章であります。

この陥り十字架の苦難を通過する時、復活の勝利と栄光があることを我々は確信する。

(1) 分断の現実から

平和を愛するわが民族は世界史の流の中で、米・ソ連強大国の利害關係により、国を南北に分断された。この分断により、わが民族は恨みや悲劇と不幸を招いて来たが、六・二五戰争は、三千里の錦織江山を隔離となし、約六〇〇万の同胞を犠牲とし、一千万の離散家族を産んだ。今日、南北的として配置された米・西の核兵器群は、わが民族の存亡を脅かしている。

祖国の分断は、海外同胞にまで、葛藤と憎悪と分裂と敵対關係をもたらし、大韓民国政府を支持する民団と朝鮮民主主義人民共和国政府を支持する朝鮮道との反目と対立は今も続いている。

一方、このような現実に失望した同胞たるが、日本政府の同化と追放政策によってたくさん日本に帰化し、今日に至るまでも、而も日本に帰化しておらず、民族の分裂はより深刻になっていた。

日本政府はわが祖国の分断による対立を逆利用して、わが同胞の分裂を助長し、同化政策と追放政策によって民族差別を煽り、それができないよう力を分散させていた。それゆえ、帰化同胞は、日本同化政策の犠牲者である。

顧みれば、今後、帰化同胞が、韓民族の後孫であるといふを自負して、此差別」と平和のための運動に参りこむべきが何よりも家庭の背にしみる苦痛の声、日本の対日政策によって帰化せざるが

我々は長い間、祖国の平和と統一を念願し、研究と祈禱を続けて来た。このたびの韓国キリスト教教会総会(KNCOC)が昭和61年11月19日、第37回総会で採択発表した「民族統一と平和に対する韓国キリスト教宣言」を因め、これを慎重に研究、検討した後、次の

ようにわが総会の立場を明らかにするものである。
日本に住む在日同胞は不幸な歴史の中を日帝によって説教運行された韓民族の子孫たるものであり、眞の解説なき日本の延長によりて民族のあらゆる精神と尊重を蒙らなければならぬ。我々は、このよみだ限界など、差別を撤廃し、人権を擁護し、社会正義を実現するため闘ういたゞく。また我々は、キリストの和解の福音に立脚して分断された同胞、すなわち民団、朝鮮道、帰化同胞の和解を図り、祖国の統一と平和が成就されるために寄り添ういたゞく。これがわが総会の宣教的課題であると宣言する。

この道は遠くかり難い六十数年の道である。しかし、この道はわが民族の生むる道であるがゆえに、どんな犠牲があつても、行か

らねる。
わが総会は在日同胞たる在日の民族差別に抵抗し、指紋捺印抗議運動を展開して来た。一方、祖国に行って勉強していく在日留学生の中で、民族統一を願って行なったことが流落となつて、帰京された学生たるが、民族分断の犠牲者だと云ふよう。

わが総会は、このよき民族分断の悲劇を克服し、平和と統一が一歩も早く成し遂げられねばならないと信じ、あるのである。

(2) 異の都田

わが総会は、祖国の分断が引き起こした悲劇について深く悔い改める祈りをささげる。わが民族の分裂は日本帝国主義の敗戦による米國とソ連の政治的な責任のみでなく、わが民族の自主性と、統一された民族の主体性を形成できなかつた我々の責任が大きかったことを深く自覚し、悔い改める。

わが在日同胞が南北政府の分断政策を批判するいとなく、便乗、あるいは無効論で終わることで、三十八度線のなご日本の地にやがて、分裂した民族となりたといふ。福音のまことを傳ずるわが総会が、「ひとりにならなき」と、わが在日のみの神を実践できたことを誓い改める。

わが総会は和解と愛の福音を宣教しながら、民族の痛みと祖国の平和と統一について決意をもつていたことにして悔い改める。

未だ存在する離散家族の很多の苦痛と涙、そしてサヘルの難民の家庭の背にしみる苦痛の声、日本の対日政策によって帰化せざるが

得なかつた帰化同胞たちの困難と苦境、また南北とおなじでイナガロギーの対立によって政治犯懲罰として獄苗を送りつづけるものたゞいとの家庭の苦痛と訴えを寄せるばかりいた罪を犯す」、無權利の状態で抑圧されている問題たゞの涙を流しての叫びを察せられなかつたことを悔ひ改める。しかし、我々は即ち、そのじゆわに仕ぶるやうに屬していくが、これ以上、積むことなく、互にあらざる兄弟姉妹として受け入れるといふ、此處の「統一」と平和のため活動する時が来たと感ず。

(3) 指し手和解に向かひ

祖国の平和と統一は、我が民族の最も具体的かつ現実的な問題であつて、時代の要請であるがゆえに、わが総会はキリストの和解の福音に立脚してこの運動に参与する。

神父、イヤス・キリストの地上において我々を神と保証されし者としていたから (ハバクク・15~16) いわば福音の福音大ならからである。

神は我々の罪を許し、和解のみことばを我々に教わられた。われにわが総会は、韓国キリスト教教会協議会が発表した「平和と統一と開拓の宣言」を廻して、(1) 和平、(2) 平和、(3) 大同团结、(4) 人権保障、(5) 人民参与の五大原則を支持する。なぜならば、この五大原則は、外勢ではなく、我が民族の自主的な統一であり、武力でなく平和の統一であつて、南北のどよりの側も排除せず、大同团结による

統一であり、人権尊重でなく、人権を尊重する統一であり、いかなる権力でもなく、全民衆の参与による統一を意味してくるからである。我々は、この五大原則を立脚して、まず、離散家族の南北両由往来、スポーツ、文化、経済交流、そして休戦協定を平和協定に転換されが、眞諦と尊信の縮小、そして南北合意をたてて平和と安定が国際社会に完全に保証される時、あるいは外國軍基地と核兵器が撤去されねばならない。

また日本社会の差別を撤廃し、和解と平和のため努力するといふ點で、あらゆる階層の対立と分裂と植民地を廢止し、正義と愛と和解によって総国統のシャーマンを實現させようとするものである。福音あるこの運動に参与する我々の眼をよみ、助けたもうひとを福音か。

(4) 嘘年 (ハグムの年) に向かひ

韓国の教会は、一九四五年に嘘年として宣佈した。これは、神が定めたやうだののやうな記述。8~10) 五十年毎に守る祝祭の年である。この年は自由と平等による土地の均等分配と原状回復の年であり、持てるものと持たぬるもの、支配者と支配されたもの、主人と奴隸のあいだの解放年である。

我が民族の嘘年は何がなされねばならないだろうか? わが民族の真的嘘年は、平和と統一がなされる年とならねばならないであらう。この年には、国際化された南北の國土がひとつとなり、故郷

を離れていた離散家族たちが、故郷や父母と子女、兄弟と姉妹が相

合の年とならねばならないのだね。

この年が真に民族の祝祭の年となることを我々は望むものである。この嘘年には、日本社会で差別を受けて居る同胞と全世界のあるところに關かい、不当な差別と虐待、貧窮と不憲、朝鮮着い被抑圧者の怨恨が、キリストのひじょう懷に抱かれて解脱され、今も依然と貯のショコーム (平和) が繕がれる年とならなければならぬのである。

我々はこの嘘年の夢が実現されるよう祈るるのである。

教育と宣教を具体化してゆく。

(8) わが総会は、祖国の統一と平和のため、本固葉茂の日本教団と世界教会の連帯と教説を継続してゆく。

(9) わが総会は、日本社会の差別問題を撤廃するため而も過か難寺へ向かう。

わが総会は、世界平和の実現のため、韓半島のやむある核兵器をはじめ全世界の核兵器撲滅運動によつて参事して行く。

一九八六年七月五日

在日大韓基督教会 総会

- (1) わが総会は、毎年八・一五節由由を「民族和解と統一」のための「主日」としておこなふ。
- (2) わが総会は、離散家庭のためのため努力する。
- (3) わが総会は、民族記念行事を民族・報恩・帰化同胞と共同で開催である努力する。
- (4) わが総会は、在日同胞が南北の地を自由に往来できるよう南北政府に陳情する。
- (5) わが総会は、朝鮮基督教徒団との交流をもつくり、漸進的時期に宣教協約を結び、共同で南北統一のため努力する。
- (6) わが総会は、理念を超えて人道的な意味で南北地域で人権尊重と抑圧などの問題が実現されるなどを祈る。
- (7) わが総会は、宣教九〇周年に向かって平和と統一を祝する。

日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会との宣教協約

I. 序

日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、神によって立てられた公の教会に属する群れとして神の恵みと真理の豊かさに共にあずかるために、1997年10月21日をもって、宣教協約を結ぶ。

日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、この時にあたり、以下のことを表明する。

日本キリスト教会は、在日大韓基督教会との関係の歴史を顧みるとき、ここにまで導かれた神に、深い感謝と讃美とをささげないではいられない。日本キリスト教会がその名称と歴史と信仰の伝統を継承する日本基督教会は、アジア諸国に対する国家の侵略を容認し、植民地となった地域に移住した日本人への伝道をこととして中会を建設し、現地教会には神社参拝等偶像崇拜を強要して、その侵略政策に荷担した。在日大韓基督教会の前身である「在日」朝鮮基督教会から、十五年戦争下国家の宗教団体法により存続の危機を迎えて協力を求められた時、日本基督教会は交渉のなかで、日本基督教会の「信条」への服従・布教における日本語の使用、「教役者の再試験」等の条件を提示し、また、一中会としての加入の願いをも拒否し、その結果、各個教会ごとに中会へ加入させ、「在日」朝鮮基督教会を自己に「併合」した。日本基督教会は、「在日」朝鮮基督教会の兄弟姉妹にとって、日本語の強制がいかに屈辱的で悲しいものであるかを推し量ることなく、国家の「皇民化政策」を教会内に推進させた。そのうえ日本基督教会は、宗教団体法による教会合同に参画し、日本基督教会の中にあって戦争協力の歩みを共にし、「在日」朝鮮基督教会の兄弟姉妹をもその歩みに巻き込んだ。

戦後、この日本基督教会にかかる39個の教会が、日本基督教会を離脱して新しく日本キリスト教会を組織したとき、国家に対する教会の自律性を放棄したことや、日本基督教会の戦争協力と歩みを共にしたことについての罪責意識は乏しかった。そればかりか、教会が行った「在日」朝鮮基督教会併合の罪責の認識はなく、しかも、戦後直ちに発足していた在日大韓基督教会との関係回復についても長く放置してしまっていた。にもかかわらず、日本キリスト教会の「韓国・朝鮮の基督教会に対して行なった神社参拝強要についての罪の告白と謝罪」の表明に際して示された在日大韓基督教会の協力を、日本キリスト教会は感謝をもって覚える。

今、日本キリスト教会は、神の前で、それら戦前・戦中・戦後の罪責を認識し告白し、赦しをこう。

在日大韓基督教会は、日本帝国主義が朝鮮を侵略し、植民地として支配した「日韓併合」の前後に渡日した留学生・労働者を中心に形成された。当初においては朝鮮の長老教会と監理教会の協力があり、次にカナダ長老教会の伝道参加によって、1934年には「在日本朝鮮基督教大会」が創立された。國を奪われ、農地をなくし、生活の糧を求めて余儀なく日本に渡航した朝鮮人同胞は、ここでも蔑視され、差別の中での生活を強いられた。朝鮮人同胞にとって「在日」朝鮮基督教会は、心の安らぎを覚え、祖国の解放を祈り、故郷の消息や民

族の痛みを分かち合う信仰共同体であった。

「在日」朝鮮基督教会は、日本の国家権力が宗教に対する統制を本格化させる為に宗教団体法を成立させるに及んで、教会存続の危機を迎え、日本基督教会に対して在日朝鮮人伝道继续のため、協力を求めた。日本基督教会から示された合同条件に対し「在日」朝鮮基督教会は、伝道における朝鮮語の使用、教役者の認定、「在日」朝鮮基督教会の一中会としての加入等を要求し、幾多の交渉を経たが、結果は日本基督教会への吸収合併であった。この吸収合併は「在日」朝鮮基督教会にとっては屈辱的であり、苦渋のなかでの加入決断であった。

さらに日本基督教団成立時には、日本基督教会の一部として第一部に編入された。日本が太平洋戦争へと突入していく中、「在日」朝鮮人教会に対しては朝鮮独立運動への官憲の監視と弾圧、創氏改名や日本語使用、偶像崇拜等の「皇民化政策」は厳しさを増した。教会指導者が検挙されていくなかで「在日」朝鮮人教会は犠牲と苦難の道を歩んだ。

日本の敗戦は、神によって与えられた「解放の日」として記念するようになった。しかし解放の時から50年を迎、過去を謙虚に振り返る時、在日大韓基督教会は、厳しい時代状況においてではあったが日本基督教会への一方的な吸収合併、偶像崇拜への抵抗と拒否に関して徹底を欠いたことへの悔い改めがなされていないことを覚える。

戦後「在日」朝鮮基督教会にかかる諸教会は日本基督教団を脱退して在日大韓基督教会として新しい歩みを始めた。在日大韓基督教会は、おもに日本に留まつた同胞への伝道と、民族差別の中で苦悩する同胞の重荷を共に負うことを使命とした。その中で隣人教会としての日本キリスト教会が示した協力を覚える。

日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、戦後50年を経過してなお、何等相互に公的な教会の交わりを持つことがなかったにも拘らず、世界改革教会連盟に加盟し、その連盟の東北アジア部会につらなつて、特に1980年代以降には両教会の交流が活発になされ、今日に至っている。両教会は、キリストの教会として平和と正義のために働き、また、すべての創造されたものが互いに共生するために働くことが、自分たちに与えられた使命であると信じる。すでに与えられている関係に立ちつつ、宣教の協約を結ぶことは、福音宣教と教会形成に関し、教会の一一致と眞の和解を成就するための働きとして、日本とアジア、ならびに世界の人々に、証となるものと信ずる。

日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会とは、このような歴史認識と教会としての使命を共有しつつ、両教会の公的な関係が再び新しく開かれることを願い、以下の宣教協約を結ぶ。

II. 宣教の協約

- 1、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、それぞれの職制と聖礼典を相互に認めろ。
- 2、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、特別な歴史と相互の自主性を尊重しつつ、宣教に協力することをはかる。
- 3、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、特に在日韓国・朝鮮人をはじめ社会的少数者への宣教の課題に取り組むために協力することをはかる。

III. 実施要綱

- 1、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、相互に宣教協力委員会を設置し、年1回を原則として会合を開く。
- 2、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、宣教の協力と両教会の直面する課題に取り組むために、両教会の合意の下に「指針」を作成する。
- 3、日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会は、相互に加盟している世界改革教会連盟の働きに関して協力する。

＜付記＞

- 1、「日本キリスト教会と在日大韓基督教会総会」の表記は、在日大韓基督教会総会側文書では、順序を逆にする。

1997年10月21日

日本キリスト教会大会 大会議長 多田滉 署名 在日大韓基督教会総会 総会長 李大京 署名

宣教100周年記念事業

1. 宣教100周年記念大会

日 時：2008年10月13日 午後1時～4時半
場 所：大阪女学院ホールチャペル

2. 宣教100周年記念合同修養会

日 時：2008年8月13～15日

場 所：東京プリンスホテル

主 題：「感謝の百年、希望の百年」(I テサロニケ 5：18)
「감사의 100년, 희망의 100년」(골전 5:18)

副 題：「遣わされたこの地で宣教に参与する教会」(創世記45：5)
「보내심을 받은 이 땅에서 선교에 참여하는 교회」(창 45:5)

講 師：金仁煥博士（総神大学校総長）／李清一牧師（在日韓国基督教会館館長）
權五成牧師（韓国基督教教会協議会総務）／鄭信天長老（韓国治癒福祉研究所所長）

主 催：在日大韓基督教会

主 管：合同修養会実行委員会

参加者：338名

3. 第6回 海外韓人教会 教育と牧会協議会

日 時：2008年4月2～4日

場 所：東京教会、長野県松代

主 題：「하나님이 보내신 땅에서」(腓 29:7)

講 師：金性済牧師（名古屋教会牧師）／Glen Davis牧師（カナダ長老教会 元総会長）

主 管：在日大韓基督教会

参 加：85名

4. 第14回 K C C J 人権シンポジウム

日 時：2008年4月20～22日

場 所：関西セミナーhaus

主 題：「宣教100周年を迎えるK C C J と人権—マイノリティ教会としての使命」

講 師：丹羽雅雄氏（弁護士）／志村真牧師（中部学院大学短期大学部宗教主事）

發 題：李清一牧師（在日韓国基督教会館館長）／佐藤信行氏（在日韓国人問題研究所所長）
李恩子氏（関西学院大学客員講師）

主 催：在日大韓基督教会（K C C J ）社会委員会、在日韓国基督教会館（K C C ）

西南K C C 、在日韓国人問題研究所（R A I K ）

参 加：39名

5. 歴史関係の制作・出版

①『祈りと共に一目で見る宣教100年の歩み』の発刊

②DVD『在日大韓基督教会 宣教100周年略史（1908 - 2008）』の制作

③『宣教100周年史』の発刊：100年の通史

6. 10カ年計画事業

①宣教100周年会館の建築：宣教宣教研究所およびマイノリティ国際人権研究所の設置

②総会神学校の充実

③韓国における「在日センター」の設立（ソウル）

大会宣言文

宣教100周年を迎えた私たち在日大韓基督教会は、過ぎし100年の間、ディアスポラ（散らされた民）としての私たちの歩みを見守り、導いてくださった神に感謝いたします。

私たち在日大韓基督教会は、宣教が開始された時から今日にいたるまで、在日大韓基督教会に集い支えてきた先輩たちの信仰を継承し、新たな100年に向かうにあたって、神が派遣してくださった地における宣教使命を確認し、それらを実践する決意を、ここに表明いたします。

1. 私たちは、在日社会および日本社会に生きる人びとが福音によって生かされるための方策を具体的に研究・実践します。
2. 私たちは、教会における多様性を神から与えられた祝福として感謝し、豊かな信仰共同体を形成することに努めます。
3. 私たちは、在日大韓基督教会としてのアイデンティティを確認し、合同教会としての内実を整えるために努力します。
4. 私たちは、あらゆる暴力を克服し、自然環境を含むすべての神の被造物が共生する世界の実現に向けて取り組みます。
5. 私たちは、子どもたちが自らを肯定的に受けとめ、平和や命の尊さを知る心を育む教育を推進します。
6. 私たちは、多民族・多文化共生社会を日本において実現するため、「外国人住民基本法」の制定に向けて取り組みます。
7. 私たちは、祖国の平和統一をはじめ、分裂のあるところに和解をもたらす「和解のしもべ」としての働きを行います。
8. 私たちは、神の宣教の業に共に参与するため、女性や青年が教会の意思決定に積極的に参加できる道を広げるよう努めます。
9. 私たちは、在日大韓基督教会をはじめ、在日社会、日本社会、アジア、世界においてキリスト教の精神をもって仕える働き人を養成します。
10. 私たちは、世界の教会の一致に向けたエキュメニカル運動を日本の教会、本国の教会、アジアおよび世界の教会と共に推進します。

私たちは、これから始まる新たな100年においても、私たちと共に歩んでくださる主の導きを信じ、神から与えられた宣教的使命に取り組むことを通して、神の國の実現に向けて歩むことを宣言します。